

研

平成 28 年度

—研究紀要—

けん

《 28 号 》



大館市教育研究所

目 次

I	はじめに						
	○「未来からの留学生へ」	大館市教育委員会	教育長	高橋 善之	…	1	
	○目指すものは	大館市校長会	会 長	花岡 郁男	…	2	
II	第28回「大館市教職員研究実践発表会」要項				…	3	
III	第28回「大館市教職員研究実践発表会」発表者及び発表題				…	4	
IV	第28回大館市教職員研究実践発表会 発表内容						
1	「自信を持って自分の思いを言葉や行動で表現できる子どもを目指して」 ～勇気を出して、一歩踏み出そう！ 保育士等の関わりと年長児の姿の変容の記録～	十二所保育園	主任保育士 保育士	菊池 綾子 阿部 明子	…	5	
2	幼保小必見！いじめと向き合う“ワンランク上”の学級づくり 5つの法則	城西小学校	教 諭 教 諭	大越 章弘 後藤 宏祐	…	7	
3	主体的・協働的な学びへの挑戦（算数科） ～チャレンジレッドで釈迦ナイス～	釈迦内小学校	教 諭 教 諭 教 諭	沼倉 健 佐藤 千夏 亀井 貴子	…	9	
4	Road to Challenge 活動編	花岡小学校	教 諭 教 諭	金 拓祐 永瀬有希子	…	11	
5	日常的な万能文具をめざして ～上川沿小学校のタブレット活用実践～	上川沿小学校	教 諭	富沢 章彦	…	13	
6	生きる力を育む中学校数学科指導の在り方について ～中央研修に学ぶカリキュラムマネジメント～	南中学校	教 諭	田山 律子	…	15	
7	多様なニーズに応えるスクールカウンセラーの取組について	東中学校	教 諭 スクールカウンセラー	児玉 清子 石塚 章	…	17	
8	大人を変える子どものちから ～大館市子どもサミットのSINKA～	教育研究所	指導主事	藤嶋 俊英	…	19	
9	「遊びを通しての体づくり」 ～矢立保育所ならではの実践を目指して～	矢立保育所	主任保育士 保育士	伊藤 幸美 高杉 道代	…	21	
10	崩壊寸前学級からの脱出 ～校内の特別支援教育システムのあり方～	桂城小学校	教 諭 教 諭	間嶋 祐樹 藤井 惠理	…	23	
11	1から始めるティームティーチング ～アクティブ・ラーニングのための基本、A・B・C～	城西小学校	教 諭 教 諭	渡辺 智一 米田 樹史	…	25	
12	エゾタンポポプロジェクト ～命をつないで～ 7年間の軌跡	長木小学校	教 諭 教 諭 教 諭	望月まゆみ 花田 千鶴 佐々木昂大	…	27	
13	資料で考える社会科、資料で活動する社会科 ～色んな資料を作ってみよう～	成章小学校	教 諭	山本 起嗣	…	29	
14	Road to Challenge 授業編	花岡小学校	教 諭 教 諭	永瀬有希子 金 拓祐	…	31	
15	進化し続ける「ブルーリボン運動」 ～いじめを防ぎ、潤いのある生活を目指して～	第一中学校	教 諭	小玉 智和	…	33	
16	小・中の関連を考慮した古文や漢文などの古典指導はどうあればよいか	下川沿中学校	教 諭	井川良太郎	…	35	
V	平成28年度 教育研究所事業報告					37	
VI	あとがき						



「未来からの留学生へ」

大館市教育委員会 教育長 高橋善之

現在、小中学校で学ぶ子どもたちは、その大半が21世紀を生き抜き、22世紀まで到達する生涯を有している存在である。いわば、彼ら・彼女らは「未来からの留学生」なのである。それでは、彼ら・彼女らにどんな学びを提供すべきか。それは、21世紀を生き抜くための知識・技能はもちろんのこと、未来を創造する際にベースとすべきスピリッツ（精神・理念）であろう。それは、とりもなおさず、私たちがめざしている「少数精鋭の街 大館」を構成する柱とすべきスピリッツでもある。私たちはそれを次の五つと考えている。

- ①**本当の幸いを希求する街**＝経済性・利便性最優先の価値観と一線を画し、「人と社会の本当の幸い」を希求する街 賢治のイーハトーブ
- ②**自然との共生をめざす街**＝豊かな森と大地と水の恩寵に感謝し、人間も自然の一部として、自然との共生をめざす街 縄文の真理
- ③**独立自治と包摂の街**＝独立自治の誇り高き精神性を継承しつつ、多様な人財や思想・文化をその懐に取り込める街 平泉型浄土世界
- ④**未来人財を育成する街**＝未来市民たる子どもたちの笑顔や成長を活力となし、市民が協働・連帯して人財育成に努める街 未来志向教育都市
- ⑤**経済的自立の可能な街**＝ふるさと資源や先端技術力を活かし、積極的に全国・世界と交易をなし、経済的自立ができる街 21世紀型交易都市

経済に関して、①では「一線を画す」としながら、⑤では「積極的に」としていることについて、若干の補足を加えたい。現実としてこの世界は経済原理優先で動いており、経済的活動を度外視しては、大館の経済的自立や市民生活、引いては市財政そのものが立ちゆかなくなる。とすれば、「経済優先主義」とは一線を画すとしても、この地にて産業を興し、世界・全国と交易し、(市)外貨を獲得できる人財の育成も不可欠である。経済的世界の中で生き抜いていくには、経済的な見方・考え方も身につけ、グローバルな感覚やコミュニケーション力も必要である。言うなれば、「経済的センス」と「英語力」を身につけることは、「未来からの留学生」にとっての必修科目であり、キャリア育成なのである。そのため、次年度からは、「未来人財プロジェクト」における「ふるさと起業家」「グローバル人財」育成の方策と位置付け、「経済教育」と「英語力強化」の施策を具体的に進める計画である。

大館の教育を起点とする地域社会イノベーションは、これまでどの地方都市も達したことのない高度にまで至っている。さらなる進化を促す新たな価値やエネルギーも連鎖的に生まれ続けている。そして、その中心にいる「未来留学生」たちの成長が著しい。これから先、大館において、どんな景色が展開されていくのか、楽しみにしているところである。

目指すものは

大館市校長会 会長 花岡郁男

大館市教職員研究実践発表会は、今年度で28回目を迎えました。今年は17組の発表があり、それぞれの特色ある実践が紹介されました。今年度の発表も教科指導や特別活動、生徒指導など多岐にわたっていますが、ここ数年と比べると、ふるさとキャリア教育に関する内容が少なくなってきたように感じます。これは、各校の「百花繚乱作戦」が展開される中で、その取組が浸透し、周知されていることの証しかと思います。

ふるさとキャリア教育フォーラムも3年目となり、今年度は「ここまで進化 大館ふるさとキャリア教育」「変わりつつある 大館の授業」「ふるさとキャリア教育のこれからに向けて」の3部構成で行われました。大館市の教職員全員でふるさとキャリア教育の成果や課題を共有することができる貴重な場であります。

フォーラムの中で、釈迦内小学校の三浦校長先生が、「活動のルーティン化によって、目的が忘れ去られる」ことの懸念について述べられました。私たちが取り組んでいく上で、しっかりと心に留めておかなければならないことです。学習や活動に取り組む先には、達成すべきねらいがしっかりと定められています。何のために取り組むのか。取組を通じて、子どもたちにどんな力を身に付けさせたいのか。その根本が置き去りにされ、活動が形骸化してしまうようなことは、決してあってはいけません。目的が達成されるものでなければ、しっかりと改善や改新を図っていく必要があります。

原稿に向かっていると、パソコンの初心者だった頃、手作りのカラーOHPシート等を活用してグラフを作成し、発表会に臨んだ当時を思い出します。当時は中央公民館の2階の和室で懇親会を行いました。管理職の方々が発表者を慰労するような形で行われていたように記憶しています。現在の懇親会は、各校の先生方がたくさん参加し、大館市の教育の新年を祝いながら、決意を新たにし、全員一丸となって子どもたちの教育のために力を合わせよう、という雰囲気が満ち溢れています。この意欲が市全体のパワーとなり、子どもたちの成長のために注がれていくのだと確信しています。

山頂を目指すためのルートが様々あるとしても、最後まで平坦な道のみが続くような登山道は存在しません。苦勞しながらも、それまでの足取りを振り返って見た時に、確かな足跡を感じることができるはず。山登りに長けた人は、単独でも登っていくことができますが、初心者は、案内人の援助を受けながら、様々な経験を積み重ねつつ山頂を目指していきます。たくさんの仲間と共に、上を目指して歩み続けたいものです。

第28回「大館市教職員研究実践発表会」要項

- 1 目的 日常の教育実践・研究の発表を通して、子どもたちの可能性を伸ばすよりよい指導方法の追究と教職員の資質の向上を図る。
- 2 主催 大館市教育委員会
- 3 主管 大館市教育研究所
- 4 期 日 平成29年1月6日（金）
- 5 場 所 大館市立中央公民館・大館市民文化会館
- 6 内 容 ・教科指導、総合的な学習の時間、情報教育、特別支援教育、就学前教育、海外研修などの教育諸活動全般について
 ・おおだて型学力を育成する授業の取組等について
 ・日常、学級や学年、または校務担当者として実践研究していることについて
 ・ふるさとキャリア教育の理解推進、または実践事例について
- 7 対 象 ・小学校・中学校の全教職員及び幼稚園・保育所、高等学校、大学等教育関係者ほか
- 8 日 程 12：40～13：20 発表会Ⅰ（40分）
 13：40～14：20 発表会Ⅱ（40分）
 14：50～16：20 全体会（90分）
 17：30～19：30 懇親会
- *発表会Ⅰ発表題につき20分以内の発表、質疑の時間は15分から20分程度
 ただし、講座N○9に関しては12：40～14：40の連続講座。
 *移動・休憩時間ではありますが、14：30から文化会館大ホールにて「城南小学校作成CM」「東館小学校はちくんダンス」「博報教育フォーラムの様子」等のDVDを上映します。
- 9 全体会 ふるさとキャリア教育フォーラムⅢ
 「ふるさとキャリア教育のこれからに向けて」
 第1部 ここまで進化 大館ふるさとキャリア教育
 第2部 変わりつつある 大館の授業
 第3部 ふるさとキャリア教育のこれからに向けて
- パネリスト
 第1部 嶋野道弘氏（前文教大学教授）、高橋善之教育長、三浦栄一釈迦内小学校長
 第2部 嶋野道弘氏、高橋善之教育長、伊藤哲朗花岡小教頭、米澤貴子教育専門監
 第3部 嶋野道弘氏、中許善弘氏（一般社団法人CEEジャパン）、高橋善之教育長
- 10 実行委員 実行委員長 阿部 剛士（東中） 副実行委員長 中井みどり（桂城小）

No.	所属校	氏名	No.	所属校	氏名
1	桂城小学校	中井みどり	14	西館小学校	松下 健
2	城南小学校	田村美穂子	15	東館小学校	金 圭子
3	城西小学校	小林 要	16	早口小学校	鈴木 岳行
4	有浦小学校	菊地 悠希	17	山瀬小学校	佐々木聡子
5	釈迦内小学校	武石 郁子	18	第一中学校	富樫 敦
6	長木小学校	伊藤 春美	19	北陽中学校	中嶋舞衣子
7	川口小学校	奥山 法子	20	下川沿中学校	佐藤 朋子
8	上川沿小学校	川崎 裕	21	南中学校	佐藤 紀博
9	成章小学校	佐藤 衛	22	成章中学校	千葉 彦希
10	花岡小学校	富樫 菜子	23	東中学校	阿部 剛士
11	矢立小学校	菊池 貴昭	24	比内中学校	根本 大輔
12	南小学校	松岡 晴子	25	田代中学校	阿部 博之
13	扇田小学校	福司 一夫			

第28回「大館市教職員研究実践発表会」 発表者及び発表題

時間帯	No	発表者	所 属	発 表 題
I	1	菊池 綾子 阿部 明子	十二所保育園	自信を持って自分の思いを言葉や行動で表現できる子どもを目指して ～勇気を出して、一歩踏み出そう！ 保育士等の関わりと年長児の姿の変容の記録～
	2	大越 章弘 後藤 宏佑	城西小学校	幼保小必見！いじめと向き合う“ワンランク上”の学級づくり 5つの法則
	3	沼倉 健 佐藤 千夏 亀井 貴子	釈迦内小学校	主体的・協働的な学びへの挑戦(算数科) ～チャレンジレドで釈迦ナイス～
	4	金 拓紘 永瀬 有希子	花岡小学校	Road to Challenge 活動編 (子どもたちの主体性にまかせきる)
	5	富沢 章彦	上川沿小学校	日常的な万能文具をめざして ～上川沿小学校のタブレット活用実践～
	6	田山 律子	南中学校	生きる力を育む中学校数学科の指導の在り方について ～中央研修に学ぶカリキュラムマネジメント～
	7	児玉 清子 石塚 章	東中学校	多様なニーズに応えるスクールカウンセラーの取組について
	8	藤嶋 俊英	教育研究所	大人を変える子どものちから ～大館市子どもサミットのSINKA～
I II	9	中許 善弘	一般社団法人 CEEジャパン	人生は選択の連続だ ～情報革命の新時代における教職員の役割は何か～
II	10	伊藤 幸美 高杉 道代	矢立保育所	遊びを通しての体づくり ～矢立保育所ならではの実践を目指して～
	11	間嶋 祐樹 藤井 恵理	桂城小学校	崩壊寸前学級からの脱出 ～校内の特別支援教育システムのあり方～
	12	渡辺 智一 米田 樹史	城西小学校	1から始めるティームティーチング ～アクティブ・ラーニングのための基本、A・B・C～
	13	“チーム長木” 望月 まゆみ 花田 千鶴 佐々木 昂大	長木小学校	エゾタンポポプロジェクト ～命をつないで～ 7年間の軌跡
	14	山本 起嗣	成章小学校	資料で考える社会科、資料で活動する社会科 ～色んな資料を作ってみよう～
	15	永瀬 有希子 金 拓紘	花岡小学校	Road to Challenge 授業編 (基礎・基本の徹底の授業とチャレンジ授業)
	16	小玉 智和	第一中学校	進化し続ける「ブルーリボン運動」 ～いじめを防ぎ、潤いのある生活を目指して～
	17	井川 良太郎	下川沿中学校	小・中の関連を考慮した古文や漢文などの古典指導はどうあればよいか



「自信を持って自分の思いを 言葉や行動で表現できる子どもを目指して」

～勇気を出して、一步踏み出そう！

保育士等の関わりと年長児の姿の変容の記録～

大館市立十二所保育園（指定管理者 社会福祉法人大館感恩講）

主任保育士 菊池綾子

保育士 阿部明子

1 はじめに

保育園の大きな役割は、子ども自身が自ら持っている発達する力を活かし、側面的に支援することで、その子どもの発達を保障することである。発達支援を中心に捉えた保育を展開するには「質の高い保育のあり方」が必須である。職員一同で、この視点について話し合いながら、恥ずかしさや緊張、不安から様々な場面で自己発揮することが少々苦手だった年長児に焦点を当て研究を進めてきた。

2 研究の仮説

地域の人との交流を通して、「認めてもらう」「喜んでもらう」「楽しい経験」「嬉しい経験」を重ねたり、保育士等がねらいに応じた適切な関わりをしたりすることで、『自信を持って自分の思いを言葉や行動で表現できる子ども』が育つであろう。

3 具体的な取組

(1) 実態把握

①あいさつについて保護者アンケートの実施～7月、12月の2回実施

②園における遊び、生活を通して見えてくる課題を探る

(2) 事例を通して、子どもの育ちの変容の見取り

①地域との交流

②園での遊び

(3) 保育士等での意見交換（KJ法を用いて）

①育ちの読み取りについて

②ねらいの設定について

③よりよい適切な援助について

〈子どもの読み取りの視点〉

A 話す・聞く

(思いを伝えたり聞いたりしている場面や心の動きはどうか)

B 人との関わり

(地域の人と触れ合うことでどのような感情の体験ができるか)

C 場の経験

(保育園以外でも回数を重ねることで、場に慣れ安心して行動できるか)



4 実践事例からの考察

あいさつについての保護者アンケート

- ・親しみや心地良さを感じる気持ちが育ってきている。
- ・保育士等や保護者が手本になること、子どもの姿を認めることが大切。
- ・心の安定、自己肯定感、仲間意識の芽生えを感じる。

園での遊びから（視点Aにかかわって）～縄跳び遊びを通して

- ・保育士等の言葉よりも、友達からの応援やアドバイスが子どもの気持ちにより一層響くのではないかな。
- ・必要な場面で子どもを後押しすることで、お互いを思う優しさや相手を受け入れる気持ちが育つのではないかな。



森のおうちとの交流から（視点Bにかかわって）～川遊び・ふれあい交流会・体験入学等

- ・遊びや経験を共有していくうちに少しずつ仲間意識が芽生えていった。
- ・「一緒に学校に行く人」という漠然とした思いから「友達」という関係性へ。

施設慰問から（視点Cにかかわって）～デイサービスセンター大滝へ年2回の慰問

- ・「十分に頑張った」「自分でできる」と自信を持てるようになるまでの過程が大切。その思いが個々の成長や自信あふれる姿につながった。
- ・「頑張りを認められた経験」「喜んでもらえた嬉しさ」から、親しみや可愛がってもらえていることを実感し、様々な場面で自己発揮できるようになってきている。

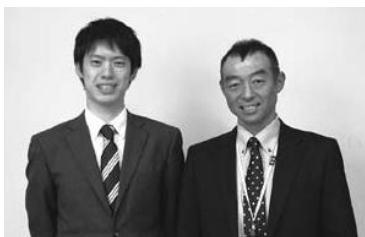


5 研究の成果

- ・驚きや感動など心が動く体験を積み重ねていく中で、「自信を持って、自分の思いを言葉や行動で表現できる」姿が見えた。
- ・「十二所の子ども」として可愛がられていることを実感し、ホッとしたり安心したりすることで、親しみやを持ってあいさつや会話ができるようになった。
- ・こまめに一人一人の今をしっかりと価値付けすることで成功体験につながり、年長児としてリーダーシップを発揮できるようになった。
- ・子どもたちを見守り、いつでも必要な場面で後押しできるようにすることで、互いに学び合う、関わる力の育ちに結びついている。
- ・いつも当たり前に来てきた交流や行事の中で、「子どもの育ちにつなげる」視点を持って意図的な働きかけをする、保育士等の意識や姿勢が大切である。

6 研究の課題

- ・子どもの成長に合わせ、いつも同じ援助ではなく任せる部分を増やすなど、待つ場面の見極めも必要だった。
- ・話し方が分からない、語彙が少ないという部分を補う工夫が必要。



幼保小必見！いじめと向き合う “ワンランク上”の学級づくり 5つの法則

大館市立城西小学校 教諭 大越章弘
教諭 後藤宏佑

1 いじめと向き合う学級づくり 5つの法則

(1) 法則1 「いじめの定義を正しく理解する」

現行の定義には「一方的に」「強い者が弱い者に」「継続的に」という言葉はない。

いじめ防止対策推進法第2条

- ① 当該児童生徒が一定の人間関係にあること
- ② 心理的または物理的な影響を与える行為であったこと
- ③ 被害児童生徒が心身の苦痛を感じているもの

京都府・・・90.6件

佐賀県・・・3.5件

秋田県・・・17.8件

2015年 問題行動等調査
1,000人あたりのいじめ認知件数

いじめの定義をどう捉えるかで、いじめ認知件数にこんなにも大きな差が生じる。

京都府と佐賀県の差はなんと25倍！！

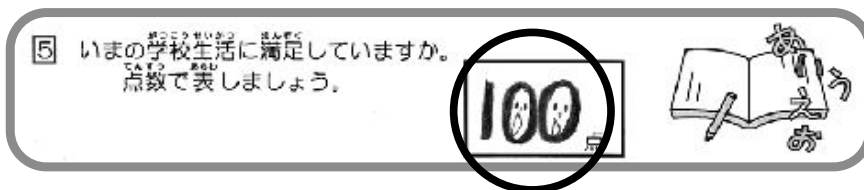
(2) 法則2 「目で見て実態を把握する」

いじめ調査アンケートによる実態把握・・・いじめ全体の50%程度 意外と低い！



そのため、実態を的確に把握するための工夫が必要となる。

- ① アンケート用紙に満足度を数値化したものを記入させる。



- ② いじめアンケートと一緒に、すべての児童と教育相談を実施する。
- ③ 目で見て実態を把握する。
 - ・休み時間や登校の様子を写真に撮って記録する。
 - ・授業の最後の5分などに立ち歩き可の時間を設けて、児童の動きを観察する。
 - ・座学以外の学習の様子を観察する。(ペアやグループをつくる際の動きを見取る。)
 - ・持ち物に目を向ける。(落書きされていないか。いたずらされていないか。)

(3) 法則3 「あたたかい集団づくりがいじめを予防する」

「ハートアップタイム」の実践

朝の集会の時間等に、心を育てる時間「ハートアップタイム」を設定

① あいさつウォークラリー
(たてわり班でウォークラリー)



にっこりいい表情であいさつします！

②エクササイズ
(グループエンカウンター・アサーショントレーニング)



ふわふわ言葉を意識して(異学年交流)

(4) 法則4 「いじめ0を最終目標にしない」

いじめを許さない集団づくりをすることはとても大切なこと。しかし、「0」という数にこだわりすぎると弊害が生じる。大事なことは、認知したいじめ事案に対して迅速に、的確に対応し、その事案の解消のために全力を尽くすことである。

いじめ「0」にこだわりすぎると・・・

- ①いじめ認知をマイナスと捉える教員が出てくる。
- ②いじめ認知が消極的になりがちである。
- ③トラブルに対して学級担任が1人で対応するケースが増える。

平成27年7月に岩手県で起こった重大事案は記憶に新しい。当該中学校のいじめ認知件数は0件であった。依然としていじめ認知に対する抵抗感をもつ先生がいることから、いじめ防止対策推進法の見直しが議論されている。

教員にいじめを認知することに抵抗感がある → 認知件数が多いことを肯定的に評価する
(H27文部科学省有識者会議より)

(5) 法則5 「スピード対応が家庭の信頼を生む」

① いじめが起こるのは学校現場だけではない

通信機能付きゲーム機のメールのやり取りが、いじめに利用されているケースがある。日頃からゲーム機をチェックするよう家庭にお願いしたり、情報を提供したりすることがいじめ未然防止への大きな成果を生む。

② 即時対応が保護者との信頼関係を深める

保護者からいじめの訴えがあったときに、言うてはならないのが「しばらく様子を見ましょう」という受け答えの言葉である。「すぐに対応します。指導した内容、その後の経過についても必ずお知らせします。」と保護者に伝える。事案解決に対する真剣な態度が信頼関係を深めるのである。

2 成果 ・いじめ認知件数の多い少ないにこだわらず、認知した事案に対して組織で迅速に対応する体制が確立してきた。全校が同じ方向を向き、「いじめと真剣に向き合う」という意識をもって指導にあたるよう、生徒指導のリーダーとして努力したい。



主体的・協働的な学びへの挑戦（算数科）

～チャレンジレッドで釈迦ナイス～

大館市立釈迦内小学校 教諭 沼 倉 健
 教諭 佐 藤 千 夏
 教諭 亀 井 貴 子

1 はじめに

本校では昨年度から、算数科の授業を通して「何を教えるか」から「子どもたちと何をどう学んでいくか」という授業を創ることに取り組んできた。その中で、算数的表現や学びの表現を活用することができず、主体的・協働的な学び合いに課題が見られた。

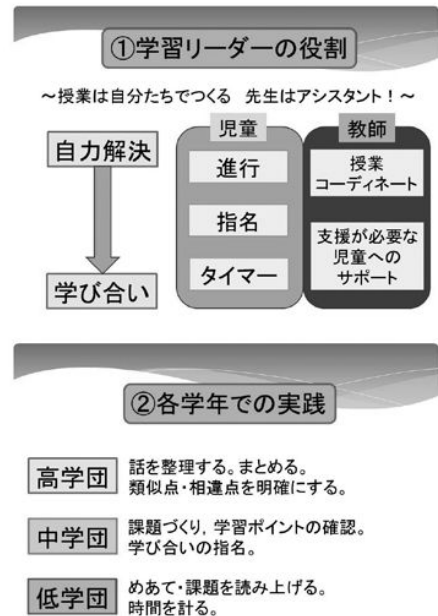
そこで、今年度は学び合いの鍵はどこまでも子どもであることを信じ、発達段階を踏まえた自分たちで創る学び合いはどうあればよいか、学習リーダー等の役割を明確にして教師のコーディネートはどうあればよいかを考えながら実践を進めた。その具体的施策について紹介する。

2 活動の実際

(1) 学習リーダーの活用

役割は、主に司会進行。自力解決から学び合いまでの時間、指名や授業のポイントを確認、考えをまとめるなどして話し合いを進める。また、学習リーダーの他にも、課題とまとめの確認する係、タイマー係などの役割のある児童もいる。教師は話す量を最小限にし、授業コーディネートやサポートに集中することができる。また、学団に応じて、目指すべき役割を示している。

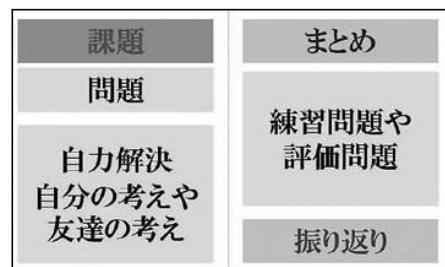
右記の各学団での実践が目指すべき学習リーダーのスタイルであるが、中学団では課題づくりやポイントの確認、学び合いのときの指名である。低学団は、めあての読み上げなどの基本的な役割を担う。



(2) ノート型指導案の作成

① 基本的なノートの使い方が確立していることによるメリット

「ノート型指導案」とは、教師が児童と同じマス目のノートを使い、課題やまとめ、予想される児童の反応、授業の流れなどを書き込んだものを指す。本校では、算数ノートの使い方を全校見開き1ページを基本としたスタイルで統一している。児童のノートと板書が一致しているため、ノートから1時間の流れを振り返ることができ、次時以降の学習に生かすことができる。



見開き1ページを基本としスタイル

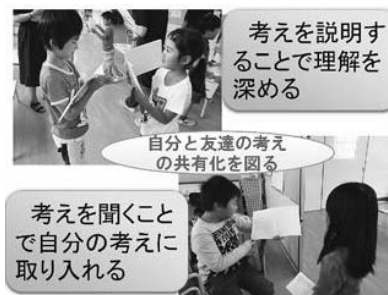
② 授業をコーディネートする上でのメリット

授業を考える際に、「課題やまとめ」、「子どもから出されるであろう考え」をあらかじめ児童と同じノートに書いておくことで、ノート指導がしやすく、本時の流れがぶれにくくなる。また、課題やまとめを予想される児童の言葉で書いておくことで、言葉や内容の精選につながったり、学習リーダーを中心として児童が課題やまとめを考えた場合にも、臨機応変に対応することができ、キーワードを落としにくくなったりするというメリットがある。

(3) 主体的・協働的な学び合いについて

① 考えの共有化を図るための場の設定

ペア、スクランブルでの交流を取り入れた。ノートに「自分の考えを書く活動」に終始せずに、自分の考えを相手に伝えるために、言葉を意識的に選択することで理解が深まった。



② 追求の場の設定

話しやすい環境・発言しやすい環境のために座席配置を工夫した。主に、コの字型、薔薇型、円卓型で授業実践を行い、人数や単元内容など、そのときの状況に応じて使い分けた。



(4) 振り返り活動の取組

「学び合った成果の共有」など、焦点を絞った振り返り活動の場を設定し、学習したことを確かなものにしたり、次時への意欲をもたせたりできるようにしている。主に振り返りの視点は授業の最後に教師が示す。高学年は振り返り名人カードを個々に貼ったり、机上に置いたりし、多くの項目の中から自分で視点を選択して、振り返りを記入する。

3 成果と課題（成果○、課題●）

- 学び合い活動を充実させたことで、分からないことを児童自身で解決できるようになってきた。
- 授業に対する時間意識を児童自身もてるようになった。
- どのようなタイミングで教師がコーディネートやサポートをしていくのか、教師自身の力量を高めていく必要がある。
- 単元や本時のねらいによって、学び合い活動を重点に行う場合と、練習問題に多く取り組む場合とを、状況に応じてメリハリをつけ、授業を展開していくことが大切である。



Road to Challenge 活動編

大館市立花岡小学校 教諭 金 拓 紘
教諭 永 瀬 有希子

平成25年の校内キャリア教育検討会より、全教育活動を通して「課題対応能力」の育成に力を注いできた。子どもたち及び教師がどう成長をしているのか。今年の実践を通して紹介していきたい。

1 実践

① フラワーストリート

全て子どもたちが活動を行うので、フラワーストリートをやると決めたのも子どもたちであった。活動を進めていくにあたり、どこにどんな花を植えるのか、花はどこから買って、何個プランターを準備するのか、土はどうするのか、誰に手伝ってもらうのか、お金はどうするのかなど、一切のお膳立てをせず、自分たちで課題に対応させ、能力を伸ばせるように見守った。



(花岡の会社に訪問する6年生)

花植え当日は、子どもたちが全校児童を集め、並べ、説明し、作業に取りかかった。しかし、作業場所から100mもプランターを運ばなければならないので、プランターをひっくり返したり、土が足りなかったりなどのトラブルが続いた。時間もかかるが、子どもたちがどう取り組んでいくのか、教師は「待ちの姿勢」で臨み、介入を最小限にし、あくまで子ども主導の活動にしていった。そのため、子どもたちは自主的に集まり、ミーティングを開き、課題を解決しようとする。

介入するときも、「ひと言」だけの介入にとどめた。すると子どもはどうにかしようと声をあげたり、相談を始めたりする。せっかく介入するのだから、子どもの脳をアクティブにするために、話すことを精選し、効果的な介入を心がけた。

② よさこいソーラン

振り付けを考え、踊りを完成させるのはもちろんのこと、練習時間の確保のための教務との打合せ、練習の時間配分、練習内容、本番の隊列なども、全て自分たちで行わせた。教師陣はここでも見守る。自分たちで練習を組み立て、うまくいかない部分をミーティングで確認し、次の日の練習に生かすということを毎日の様に繰り返し、子どもたちは少しずつ力を付けていった。自分たちで行うことははじめこそ苦労していたが、後半は高学年であればほとんどの子が全校児童に指示を出せるまでに成長していた。

2 チャレンジ活動における、教師側のスタンス

① 見守る

普段の活動から、徹底して見守る。トラブルが起きたときも、ほぼ介入しないが、安全管理等は徹底して行う。トラブルは「課題」であり、成長のチャンスにもなることも多い。しかし、学級のチームワークがしっかりと固まっていなければトラブルを見守ることができない。日頃の学級経営がチャレンジ活動の根幹を成しているということもできるかもしれない。



(低学年に指導する6年生)

② 失敗を恐れない

「子どもに失敗させるわけにはいかない。」そう思う心が、チャレンジ活動をはじめまで、私たちにはあった。しかしはじめてみると、子どもはあまり失敗をしない。彼らなりのスピードで、彼らなりにもがき、課題に立ち向かっていく。子どもたちも失敗はしたくないので、課題に必死に食らいついていく。そのときに見せるエネルギーこそが、課題対応能力だと思う。

③ 「待ち」の姿勢

「これは〇〇だから、□□してやるといいよ。」よくあるセリフですが、花岡小学校ではこれを言わず、子どもの発言を待つことにしている。教師が話せば、その場はスムーズに事が進む。しかし、そこに子どもの成長はあまり見られない。教師が発言を我慢し、子どものひらめきを待つことが、子どもを課題に対応させるポイントだと考えている。

④ タイミングを見計らった介入

基本は前述の待ちの姿勢だが、「必要最低限の」介入をすることも必要になる場面がある。それは、子どもにとってよりよい課題が生まれそうなときだ。例えば、フラワーストリートの活動で、花岡の会社の前にブランターを置かせてもらおうと意見がまとまったときのことである。子どもたちから、「じゃあ放課後に行ってみよう。」という話が持ち上がった。ここで、「いきなり行くの？」とだけ介入した。教師から「1本電話入れて都合を聞いてそれから行った方がいいんじゃない？」と話すこともできる。しかしそれは子どもたちが考えるべき「課題」である。あくまで介入は「必要最低限」で行うことで、子どもの能力を高めていくことができるのではないだろうか。

3 今後に向けて

チャレンジ活動はおそらく今後も続いていく。この原稿を執筆中の1月現在、5年生は来年のチャレンジ活動に向けて6年生と合同ミーティングを開いたり、4年生に声をかけて一緒に考えていこうとしている。時間がかかる分、計画は前年の10月頃からはじめ、4月にスタートを切ることができる用意をしている。今後も子どもたちの課題対応能力が育つよう、「待ち」の姿勢で温かく見守っていきたいと考えている。



日常的な万能文具をめざして

～上川沿小学校のタブレット活用実践～

大館市立上川沿小学校 教諭 富 沢 章 彦

1 はじめに

平成27年夏。本校に35台のタブレットが導入された。児童にとっても職員にとっても初対面のタブレットであったが、それから約1年半の間、東光コンピューターサービスさんに協力していただきながら手探りで進めてきた実践例の一部をご紹介します。



学び合いの成果をスクリーンに
タッチペンで書き込む →

2 日常的に活用するための工夫

(1) よく使うアプリのタイル化

- ・児童にとってダブルタップは意外と難しい。そこで、本体のウインドウズマークを押して振動を感じる→タイルにふれて消えるのを見るという2回のアクションでアプリを起動させるようにした。そのためによく使うアプリをタイルにして配列した。

(2) ラミネートカードで手順を掲示

- ・主な手順をラミネートカードにし、児童があらかじめ途中まで操作できるようにした。

(3) 移動用にカートを用意

- ・落下リスクの減少と移動の効率化を考え、タブレット移動用の堅牢なかごを用意した。

(4) プロジェクターの効果的活用

- ・位置合わせ用の道具の作成、ペン位置合わせ、ミュートの活用、ペンとマウスのモード切り替え、ズーム、多様な機器の接続とスピーカーの活用等を進めた。

(5) スクリーンの作成

- ・移動黒板にPPボードを貼って塗装し、実用性の高い専用スクリーンを作成した。

(6) 授業支援システムの活用

- ・アクティブスクールと授業サポーターという2種類の授業支援システムを活用した。

(7) 名簿の登録

- ・各機能に児童と職員の名簿を登録し、ログインにより活用履歴を残すようにした。

(8) 職員室PCにドリル用のアイコンを設定

- ・各職員の職員室PCからドリルの設定や成績管理を可能にした。



1年生も熱心にドリルに
取り組んでいる →

3 本校での活用事例

事例1：ノートを撮影した画像を集約、投影し、比較・検討に活用

※本校のスタンダードな使い方であり、3年以上の全学年で実施している。

事例2：東書デジタルコンテンツを全台にインストールして活用

※いろいろな点において効果絶大で、難しい操作、設定、準備を必要としない。

事例3：eライブラリの活用①まとめや発展学習としてドリル問題に取り組む

事例4：eライブラリの活用②事前に問題を配信

事例5：eライブラリの活用③ダウンロード学習の活用

事例6：eライブラリの活用④児童が「マイページ」をチェック

事例7：eライブラリの活用⑤ドリルの進捗状況をモニターする

事例8：eライブラリの活用⑥多様な成績管理

操作活動による思考→

事例9：eライブラリの活用⑦ドリル学習に限定したタブレット開放



※eライブラリは基礎学力の定着において効果が高い。様々な運用の仕方が考えられる。

事例10：URL一斉送信による動画視聴

事例11：動画による比較検証（ジャストスマイル「くらべる」）

事例12：デジタル模造紙を使った話し合い（ジャストスマイル「デジタルもぞう紙」）

事例13：デジタルノートによるまとめや相互評価（ジャストスマイル「デジタルノート」）

事例14：実験や観察の記録をワープロでまとめる（ジャストスマイル「ワープロ」）

事例15：実験や観察の記録をまとめ、伝え合う（ジャストスマイル「シナリオカード」）

事例16：絵本を撮影して、電子書籍のように閲覧（ジャストスマイル「シナリオカード」）

事例17：学習のまとめとしてプレゼンテーション（ジャストスマイル「発表」）

事例18：デジタルノートでアンケート（ジャストスマイル「デジタルノート」）

事例19：クラブで理想の国のマップづくり（ジャストスマイル「地図」）

事例20：クラブでアニメーションづくり（ジャストスマイル「発表」）

※ジャストスマイルは基本アプリとして汎用性が高い。授業サ

ポーターとの連携で多くの教科で多様な活用が期待できる。

事例21：6年生による低学年へのタブレット指導



左利き用の指導動画を見ながら、垂直な直線、平行な直線をかく練習をする →

4 「もしもこんな時」の整備

実際に活用していく中で、予期しないエラーの発生が多々あった。

また、先生方から同じような質問を受けることもよくあった。そこで、試行錯誤したり、東光さんに調査していただいたりしながらそれらの対処方法を11項目、Q&A式にまとめた。

5 タブレット・リテラシー表の作成

平成22年度に文部科学省から出された「教育の情報化に関する手引き」の中の「情報教育の目標 3観点」に照らし合わせながら、本校で行っているタブレット操作を学年別の達成目標一覧表である「タブレット・リテラシー表」にした。

6 おわりに

子どもたちにタブレットを使わせてみると、1しか教えていないのに10くらいまで感覚的に使っていくその柔軟性に驚かされることが何度もあった。子どもたちの可能性は無限だ。その可能性を具現化させるためにも、まず使ってみることが大切であり、その先におおだて型学力の実現につながる新たな授業改善の方向性が見えてくるかもしれない。本校の実践をヒントに、どなたか1人でもタブレットの活用に1歩踏み出してくださったら、うれしい限りである。

ふるさと納税による収入を財源にタブレットが整備されたと聞いたことがある。そうであるとしたらタブレットとは、遠くからふるさと大館の発展を願っている人々の想いを、それを担う未来大館市民である子どもたちの成長につなげる架け橋となるものだと私は考える。



生きる力を育む中学校数学科指導の在り方について ～中央研修に学ぶカリキュラムマネジメント～

大館市立南中学校 教諭 田山 律子

1 はじめに

平成28年度中央研修（第3回中堅教員研修）に参加する機会を頂いた。そこで、学んだことの伝達および、自分の実践を紹介したい。

2 学習指導要領の改訂について

(1) 改定の基本方針

2021年中学校の学習指導要領が全面改定となる。学習指導要領は10年後、20年後の社会を予測しながら、改定が行われている。グローバル化の進展や人工知能（AI）の飛躍的な進化により、現在教えていることが通用しなくなるのではないかとされている。予測困難な時代を生きる子どもたちにとって必要な力は、出会ったことのない様々な場面や変化に柔軟に対応できる力。AIも学習し進化する時代において、人間が学ぶことの本質的な意義や強みを問い直し、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」の視点から学習指導要領の改訂が進められている。なかでも、「どのように学ぶか」ということの重要性が示され、アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）の視点から学習過程の改善が求められている。

(2) 育成すべき資質・能力

社会において自立的に生きるために必要な「生きる力」を育むという理念のさらなる具体化を図るため、学校教育を通じてどのような資質・能力が身に付くのか3つの柱に沿って明確化している。全ての教科でこの3つの柱で育成すべき資質・能力が整理される。

- ① 生きて働く「知識・技能」の習得
- ② 未来の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成
- ③ 学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養

(3) アクティブ・ラーニング

学習内容を深く理解し、社会や生活で活用できるようにするためには、知識と思考の両方が重要。学習内容の削減は行わず、学習過程を質的に改善することを目指している。「アクティブ・ラーニング」の視点は、学校における質の高い学びを実現し、子どもたちが学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたってアクティブに学び続けるようにするためのものである。



3 アクティブ・ラーニングの数学科における授業デザイン

(1) 授業前の学習

前時までの復習は、授業前3～5分前の時間で実施。

- ・できるだけ全員参加
- ・リズムカルに
- ・元気よく



(2) 問題提示

- ・ん？本当？どうして？
- ・予想する
- ・日常生活や社会の事象から
- ・BGM（雰囲気づくり）、ユーチューブ（動画）
- ・コース選択

時には生徒が先生になって

主体的な学び

見通し

→生徒による課題提示

(3) 個人思考

1人で課題と向き合う時間をつくる

- <机間指導の工夫>
- ・ヒントコーナー
 - ・附箋でアドバイス



見とる

(4) 小グループでの話し合い

自分の考えを相手に伝えるだけでなく、相手があることを理解してくれる喜びを感じる「対話」さらには「深い学び」になるよう、グループの形態、話し合いのポイントなどその都度、工夫。

対話



(5) 全体の場での発表

発表者は、できるだけ聞いている人に質問を投げかける。違った視点から、考えを聞いたり、他の人に説明したりすることで自分の考えをより確かなものにすることができる。

深い学び

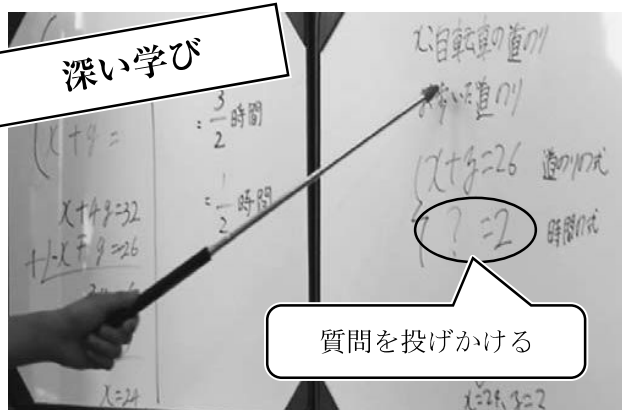
(6) まとめ

できるだけ生徒の言葉でまとめる。

(7) 練習問題および確認テスト

(8) 本時の振り返り

質問を投げかける



4 終わりに

人間の強みは、お互いの思いを理解し、自分の思いを相手に伝えることができること。今後、社会が大きく変化する中で、10年後、20年後、今の子どもたちが生き抜くためには、人との対話を大切にし、学習したことをいかに活用することができるのか、ということが大きなカギとなっている。そのために、アクティブ・ラーニングの学びが重要である。今後も、アクティブ・ラーニングの視点を大切にしながら、授業改善にあたっていきたい。



多様なニーズに応える スクールカウンセラーの取組について

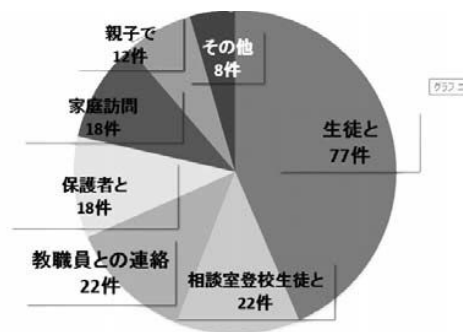
大館市立東中学校 教諭 児玉清子
スクールカウンセラー 石塚章

1 はじめに

カウンセリングとは、「相談者が自分をみつめたり、自分の気持ちを整理したり、自分に気付いていくための手伝いをする。」と定義されている。(県教委「カウンセラーとともに」より) 本校には「石塚章カウンセラー」と「駒ヶ峯恵カウンセラー」が配置されている。今年度2人が中心となって取り組んできたことについて紹介する。

2 カウンセラーが関わってきた業務内容について

生徒や保護者とのカウンセリングの他、相談室登校をしている生徒との関わり、教職員との情報交換、不登校生徒の家庭訪問、スクールカウンセラーだよりの発行、学区内の小学校へ出向いての授業参観や情報交換、1年生向けの「スクールカウンセラーによる講話」を実施した。



3 実践と成果

(1) スクールカウンセラーによる講話

こころの健康、ストレスとうまく付き合うには、考え方を工夫することと、行動を工夫することが大事である。

「友だちにあいさつをしたのに返事がなかった場合」などの具体例を挙げ、考え方と行動を変えること、問題を解決するイメージをもつことが大事である。

講話後、緊急性のあるものはなかったが、カウンセリングを申し込みたいという生徒が数人出た。3学期も、申し込みが増えてきた。教師以外にも自分の悩みを聞き、相談にのってくれる人が学校内にいるのだという安心感をもつことができたようだ。



②行動の工夫のコツ
4つの「対処行動(工夫)」

気分を変える	気分を変える行動
	気分を変えるイメージ
問題を解決する	解決する行動
	解決するイメージ

「スクールカウンセラーによる講話」より

○講話を聞いた生徒の感想

- ・疲れが溜まって心の余裕がなくなったら、迷わずカウンセラーの先生や友達に相談したいと思った。
- ・何か困ったり、相談したいことがあったりしたら、一人で悩まず、周りにいる友達や先生、親などの身近な人に相談したいと思った。
- ・相談される立場になったら、相談相手のことをしっかりと考え、よいアドバイスを与えられるようにしたい。
- ・もっと相手や自分の心を大切にして、コミュニケーションが上手くとれるようにしたいと思った。
- ・周囲の人たちとの関わりも大切にしていきたいと思った。

(2) 不登校生徒の自宅への家庭訪問

～略～

(3) 相談室登校の生徒との関わり

～略～



4 おわりに

不登校及び不登校傾向の生徒がカウンセリング後に元気に登校できるようになった生徒が増えたという数値による大きな変化はない。しかし、二人が様々なニーズに対応し、専門的な観点から対応してくれたおかげで、上記のような成果があった。カウンセリングの時間調整や、教職員との情報交換の時間確保、カウンセリングの守秘義務による連携のバランスという課題を解決しつつ、今後お互いが協力し合い、学校の一体的な相談体制を向上・充実させていきたい。



大人を変える子どものちから

～大館市子どもサミットのSINKA～

大館市教育研究所 指導主事 藤 嶋 俊 英

1 はじめに

今回の発表では、大館市子どもサミットの概要や経過を紹介し、趣旨等を理解していただくことで、よりよい大館市をつくろうとがんばっている児童生徒を応援、支援してほしいと考えている。

2 大館市子どもサミットの概要

(1) 大館市子どもサミットの目的

大館市子どもサミットの目的は、①小中共通のテーマを考えまちづくりに貢献すること、②子どもたちの視点で市民に提案、情報発信すること、③共通の取組で小中や他校と交流することの3つである。これは、子どもサミットができたころから変わらない一本の太い柱になっている。

(2) 大館市子どもサミットがつくられたきっかけ

この活動は、平成20年度からスタートし、今年度で9年目になった。当時、市教委で示している指導の重点へ、校長会から提言や要望を出した中の一つに、『小中が一体で活動できるものがほしい』ということがあり、その要望を具現化したものが、大館市子どもサミットになった。

(3) 大館市子どもサミットの運営

活動の原案を作ったり、子どもサミット代表会議で進行を行ったりする会が子どもサミット運営委員会である。これは、学校ごとに割り当てを決め、順番で担当している。今年度は、小学生4名、中学生3名の計7名と、それをサポートする先生（合同活動推進委員＝市教委が委嘱した形で、校長、教頭、7名の教諭）、事務局（市教委職員2名）がメンバーとなっている。運営委員会は年に5回程度開かれている。

この運営委員会で話し合ったことを原案とし、7月末と12月末に行われる大館市子どもサミット代表会議で話し合いが行われ、具体的な活動に入る。代表会議には、サミット委員と呼ばれる各校の児童会、生徒会の代表2名が参加し、グループ協議や全体協議を行いながらよりよい活動にするために様々な意見を出し合い、決まったことを各校に伝える。そして、具体的なまちづくりへのアクションとして実行するのが大館市内の全児童生徒であるサミットメンバーである。現在は、代表会議だけでなく、サミットメンバーみんなによる『よりよいまちづくりのために行う活動』も含めて大館市子どもサミットと捉えている。

3 これまでの軌跡

(1) 思いを形に、行動に

各年度とも『大館市のために何ができるか』を話し合ったり、活動テーマ、活動内容等を決めたりしている。平成20年度には、思いや願い、自分たちでできることを各校で話し合い、それを持ち寄って、子どもサミット代表会議で協議している。平成21年度には市内各校が足並

みをそろえた取組をするために、一斉活動日を決めてクリーンアップを行っている。当時の記録を見てみると『大人に訴えるとともに自分たちもゴミを出さないように全校児童に提案した』など、自分たちへの反省も踏まえつつ、大人へも働きかけていくことで、よりよい大館市をつくらうとしていたことが分かる。平成23年度は、地域のひととのふれあいを目的としたあいさつ運動がスタートしている。この間、キャップ回収に対する感謝状が大館市から贈られるとともに、報償品として、ベンチやプランターの寄贈があった。ベンチは、市内のバス停の待合などに置き、プランターは、被災地である釜石市へ寄贈した。当初、釜石市との交流は支援の意味合いが強かったが、最近は交流により互いの生徒会活動などの取組を学ぶことも訪問を通しての成果となっている。児童生徒の思いが思いだけに留まらず、形や行動として表れる取組があった。

(2) さらに児童生徒主体の活動に

平成26年度は、いじめ防止に向けてポスターを作成することを決め、市内小中全25校が2週間ごとにポスターを回覧した。また、高校生ボランティアグループ『HACHI』も代表会議に参加し活動の紹介や協議に入ってアドバイスをを行った。平成27年度は、各校で『みんなのよい活動をほめ合うこと』『誰かの意見、発表に反応すること』『おすすめワード&それダメワードを掲示すること』などを決めた。平成28年度には『あいさつ+α』や『みんなのよいとこ探そう』の提案、そして、取り組んでみての改善点等について話し合った。できるだけ児童生徒の考えを生かしたり自己決定の場を設けたりすることで、児童生徒主体の活動を目指してきた。この間、あいさつ運動やクリーンアップ、キャップ回収、地域のためになる活動は継続して行い、各校で工夫したり隣接する小中が合同で取り組んだりしてまちづくりに貢献してきた。また、平成27年度、28年度には、これまでの活動に加えて、大館市の総合計画や観光基本計画にサミット委員の中学生の意見を提出し、市政とのかかわりをもつことができた。



子どもサミット代表会議の様子 (H28. 12. 27)

4 今後に向けて

課題としては、①大館市子どもサミットは市内の全小中学生で取り組む活動なので、それを自覚できるように全児童生徒に目的や活動内容を周知すること、②話合いの回数が限られているので内容を精選すること、③市民へ呼びかけて協力を得たり共に活動したりすること、などである。

自分たちの活動が本当に市民の役に立ち、大人の意識を変えているのかについて市民から評価してもらい、その思いを汲んで新たな活動を作り出していきたい。また、市民の声を励みにして、児童生徒の自己有用感や自己肯定感を育みたい。

5 おわりに

子どもサミット代表会議で児童生徒に述べた高橋教育長のあいさつの一部を紹介する。

『あなたたちは、社会、大人を動かし、変える力をもっている。この活動で大館を世界一美しいまちにすることも可能である。』



「遊びを通しての体づくり」 ～矢立保育所ならではの実践を目指して～

社会福祉法人 大館市社会福祉事業団 矢立保育所
主任保育士 伊藤幸美 保育士 高杉道代

1 はじめに

本所は、周囲に田畑や山が広がる自然豊かな環境にある。残念ながら隣接していた幼稚園が平成17年に閉園、続いて平成27年に中学校が閉校となるなど、少子高齢化、人口減少が進んでいる。

2 テーマの設定理由

「すぐ『疲れた』と言う」「腕の力が弱い」「足腰が弱い」「好きなことはやるが、それ以外はやろうとしない」など、子どもたちの身体面が気になっていた。また周りに自然がいっぱいあるものの、外で体を動かして遊ぶことは少なく、メディアに触れる機会が多いという現状に危機感を感じていた。「子どもたちが一日を過ごす保育所の遊びや生活はこれでいいのだろうか?」「矢立保育所ならではの実践になっているのだろうか?」という思いから、このテーマに取り組むことにした。

3 研究の仮説

じっくり遊び込める時間・空間・遊具などの環境構成を工夫することによって、子どもたちは主体的に様々な遊びに取り組み、多様な体の動きをし、運動能力を伸ばしていくようになるのではないかと。

4 研究の実践

(1) ディリーの見直し（時間の変更と過ごし方の中味の見直し）

- ① 遊びの時間を十分確保する
- ② 雨の日も戸外に出る
- ③ 廊下でも遊べるようにする
- ④ おやつを外で食べる機会を多くする
- ⑤ 午後も園庭に出て遊ぶ



(2) 空間（場）と遊具の工夫

- ① 広い場所で思いっきり走らせたい
 - ア 小学校の体育館を借りる
 - イ グラウンドを借りる
- ② 腕の力が弱いと感じるので、腕の力を育てたい
 - ア 小学校の体育館のろくぼくを利用する
 - イ グラウンドのつり輪を利用する
 - ウ ロープの設置、布や段ボールでそり遊びなど遊具を工夫する
- ③ 足腰が弱いと感じるので、足腰を強くしたい
 - ア 散歩する



- イ 畑で野菜作りをする
- ウ 小学校の築山で遊ぶ
- ④ 思いっきり泳がせたい
 - ア 小学校の小プールに入る
- ⑤ いろいろな動きを経験させたい
 - ア 園庭の遊具を使いこなす
 - イ 巧技台を設置する
 - ウ 跳ぶ場を作る
 - エ ボール遊びの場を作る
- ⑥ みんなで体を動かして遊びたい
 - ア いろいろな集団遊びやふれあい遊び、音楽に合わせて体を動かす遊びをする



(3) 発達の系統表（平成22年度大館市福祉課作成）を用いた実態把握（6月・10月）

6月の結果を見て、当然できるだろうと思っていたことができていなかった5歳児Aに注目。育ちを振り返ってみて、見えてきたのは「体を動かして遊ぶ経験の不足」遊具を使う遊びに関して、スモールステップで遊び方に慣れていくように援助する。

5 成果と課題

- 子どもたちに変容が見られた。「転ぶことが少なくなる」「歩くことを嫌がらなくなる」「すぐ疲れたと言わなくなる」など身体面だけでなく、「やってみよう」とする意欲の面や「小さい子を思いやる」「教え合う・助け合う」など友達との関わりの面にも変容が見られた。体と心は相関関係にあることが実感できた。
- 子どもたちの変容から、「じっくり遊び込める時間・空間・遊具など環境構成を工夫する」という手立ては、子どもたちが主体的に様々な遊びに取り組み、多様な体の動きをし、運動能力を伸ばしていくうえで、有効であった。
- 矢立の自然を生かすことを保育のベースにしているが、子どもたちの変容から、自然の中で遊ぶことは子どもたちの体づくりに欠かせないものだと実感できた。
- 保育者の視点が変わってきた。1年目は『体づくり』に視点を置きがちだったが、2年目は『遊びを通して』という視点に立ち、子どもの生活や遊びへの取り組みを把握し、そこから体づくりにつながるものはないかと考え、環境づくりや援助をするようになった。
- 保育者が、その子どもなりに頑張っていることや、以前よりできるようになったことを具体的に認めるなど、一人一人の経験内容や取り組みのプロセスに目を向けることができるようになってきた。
- 子どもの人数がさらに減少することが予想されるので、それに応じた時間・空間・遊具などの環境構成の工夫をしていく必要がある。
- 子どもたちにとって必要な運動経験を、どのように日常の保育に取り入れられるか考えて指導計画を立てるようにしているが、まだまだ改善が必要である。
- 環境づくりをし過ぎてしまい「子どもたちが自ら環境に関わる」という視点が欠けてしまいがちである。



崩壊寸前学級からの脱出 ～校内の特別支援教育システムのあり方～

大館市立桂城小学校 教諭 間 嶋 祐 樹
教諭 藤 井 恵 理

1 はじめに

発達障害の子どもたちが不適応を起こし、それがきっかけとなり、クラスが荒れていくことがよくある。クラスの荒れに対して担任教師だけが対応するのではなく、チームとしてどう対応していくかが問題となる。桂城小学校では、問題が起きた場合、関係者が集まりケース会議を行う。早期に行うことで、荒れを最小限に防ぎ、改善を図る。桂城小学校におけるケース会議をはじめとしたチームでの対応について紹介したい。

2 活動の実際

(1) 桂城小学校の校内特別支援教育システム

① コーディネーター複数制

特別支援教育コーディネーターを3人制で行っている。面談やケース会議が頻繁にあるので、一人では対応しきれないからである。年間100回以上の保護者との面談や放課後のケース会議を分担しながら行う。

② 保護者との面談

- ・面談はコーディネーターが仕切る。
- ・大事な話は両親に来てもらう。
- ・次回の面談の予定を具体的に立てる。
- ・きれい事ばかりでなく、教室での子どもの本当の姿も伝える。それが子どもの困り感である。
- ・面談の報告はできるだけ全体にする。
- ・必ずお茶（コーヒー）を出す。

職場の風通しのよさが重要である。
職員のコミュニケーションが頻繁にとられている環境こそが、チームが機能する前提条件である。

③ ケース会議について

- ・司会はコーディネーターが行い、具体的な方策の検討がなされ、指導方針を決定する。
- ・ケース会議では、誰が、いつ、なにをするのかを明確にし、すぐに具体的な方策が実行に移されるようにする。
- ・1週間をめぐりにケース会議で決められた方策を実行し、フィードバックのケース会議を1週間後をめぐりに開く。
- ・ケース会議は、児童やクラスの改善が見られるまで継続して行われる。改善が見られない場合は、指導方針の変更等が行われる。改善が見られた場合のケース会議打ち切り決定を行う最終の責任者は校長である。

(2) ケース会議の実際

① ケース会議に至るまで

夏休み明け、環境の変化からA児が授業中に暴言、ネガティブ発言を行うようになり、複数の子が同調するようになった。それがきっかけとなりクラスが荒れ始めた。授業中の私語、ケンカなどが頻繁に起き、ケース会議を行うに至った。

② ケース会議での方針

- ・集団への対応と個別対応を分ける。
- ・担任はルールの確認を行い、ルールが守られなければ、その場合の対応を行う。
- ・授業のUD化を意識し、指示や発問を短くする。
- ・7年部は取り出し指導を行い、コーディネーターは面談に同席する。
- ・他の職員も随時、対象児童に声をかける。

③ 効果的だった対応

- ・めあてを決める。(友達を叩かない・先生の言うことを聞く)
- ・声のダイヤル2の声で話す。
- ・教頭先生と反省会を行う。(振り返りをし、点数をつける)
- ・休み時間は支援員の先生についてもらおう。(トラブルの防止)
- ・担任は学校での父親役に徹する。(距離を保つ・できたことは必ず褒める)
- ・母親との面談で家庭での対応について協議する。(保護者を支える)

④ ケース会議を行ったの担任の実感

- ・具体的なアドバイスを受け、やるべきことがはっきりした。
- ・担任だけでなく、いろいろな先生が関わってくれて負担が減り心強かった。
- ・毎週フィードバックを行うことで問題点が整理された。
- ・目に見えてクラスや子どもの問題が改善していき、やりがいを感じた。

⑤ ケース会議の大切なポイント

- ・誰も責めない。(責めても解決しない)
- ・対応中心の話合いをする。(誰が何をいつまでにするか)
- ・必ず評価をし、改善するまで継続する。
- ・決してあきらめない。
- ・チームとして全職員で支援する。

3 おわりに

桂城小学校では、特別支援教育コーディネーターを複数配置している。面談やケース会議が日常であり、複数いなければ対応できないからである。また、職員室では頻りに児童についての情報交換がなされ、問題の共有化が図られている。職場の雰囲気も大切である。職員が雑談できるような日々の雰囲気づくりが欠かせない。雑談をはじめとしたコミュニケーションから問題への対応の第一歩が始まるからである。そういった意味では、管理職やベテラン教師の意図的な職場の雰囲気づくりが求められる。若手教師はなかなか自分から働きかけにくいからである。

桂城小学校で行われている特別支援教育のシステムは、どこの学校でもできるものである。根気強く保護者と関係づくりを行い、問題が軽度のうちにケース会議を開き全職員で対応していく。ぜひ、どこの学校でも取り組んでいただきたい。



1から始めるチームティーチング ～アクティブ・ラーニングのための基本、A・B・C～

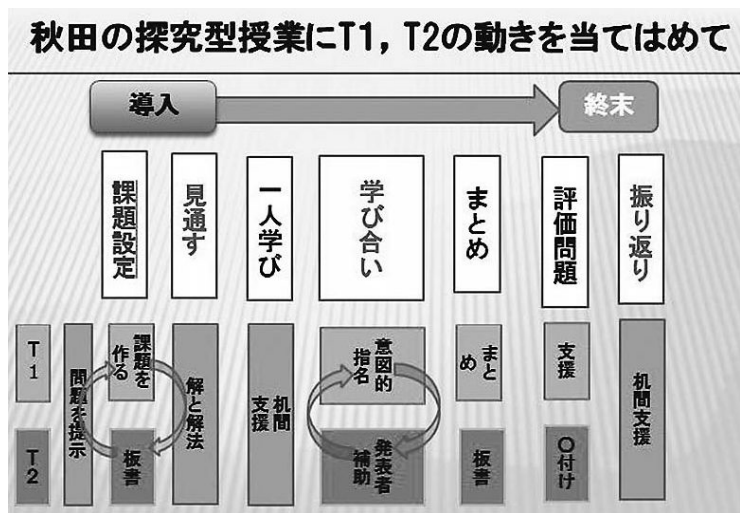
大館市立城西小学校 教諭 渡辺 智一
教諭 米田 樹史

1 はじめに

本校は平成10年度から算数の少人数学習を始めている。かれこれ15年になる。ここ数年は児童の能力差に対応すべく学級を解体し、2C3Tでの習熟度別コース学習に取り組んできた。一定の成果はあったものの多様な意見を出し合い学びを深めるという点では課題があった。そこで、今年度から課題解決に向けた学び合いを深めるための手立てとして1C2Tのチームティーチングに取り組むことにした。本稿は、新テーマでの研究1年次の報告である。

2 秋田の探求型授業とアクティブ・ラーニングに対応する

秋田の探求型授業には「中央教育審議会答申（H28.12.21）」で示された①主体的な学び（見通しをもって学習に取り組み、活動を振り返る）②対話的な学び（子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話などで学びを広げる）③深い学び（知識を深く理解したり問題を見いだし解決策を考えたりする）この3要素が入っている。それにT1、T2の動きを当てはめたのが右の表である。



3 アクティブ・ラーニングのための基本、A・B・C

(1) 基本A 課題解決のために、T2が積極的に関わる

①導入部では、板書役で終わらない。

- ・ 演示や寸劇などを行い、児童の課題意識を高める。
- ・ 既習事項を確認し、児童に学習の見通しをもたせる。

②展開部では、低位の児童につききりにならない。

- ・ T1と分担し、次につなげるために一人学びの見取りを丁寧に行う。
- ・ T1と授業中も積極的に情報交換し、ねらいに迫るコーディネートに参加する。
- ・ 黒板付近に位置し、発表児童の支援を行う。

③終末部も、板書役で終わらない。

- ・ 学習のまとめに向かって板書を整理する。
- ・ T1と分担し、評価問題の採点や振り返りの見取りを丁寧に行う。



(2) 基本B 課題解決のために、児童に具体的な手立てを示す

①解決の見通しを大切に示す。

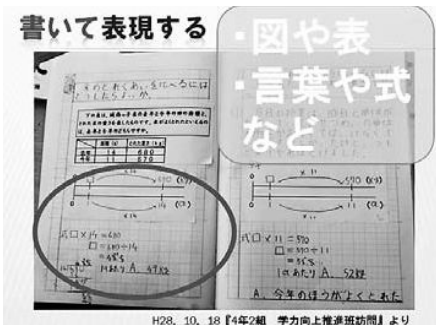


②学び合う手立てを示す。

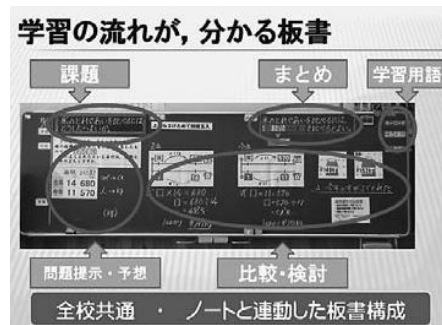


連動

③書く、話す表現方法を示す。



④学習の流れが分かる板書を構成する。



連動

(3) 基本C 何をどのように学ぶのか、共同研究で明らかにする

①打合せ時間の確保する。

毎週金曜日の放課後に単元の進度や役割分など大まかな内容を、朝や放課後に随時授業の詳細を打ち合わせることにした。それでも時間を十分確保するのは難しい。

②教材研究の流れを示す。

まずねらい、次に整合性のある課題とまとめ、そして課題解決のための学び合いを検討する。「TT打合せシート」「授業プランシート」などを活用している。

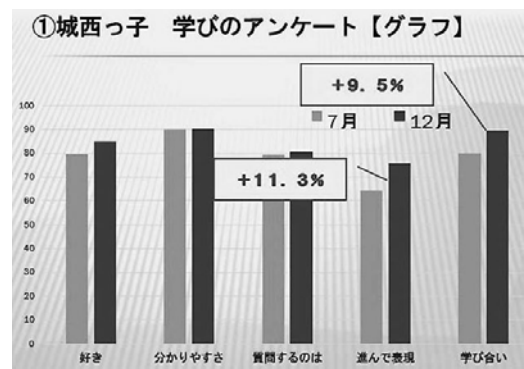
③学習環境を共同で整える。

ノートと連動した板書、自分の考えを表現する算数用語、板書資料を生かした壁面掲示、ねらいに即した評価問題を共同で検討し、共同で準備する。

4 終わりに

ティームティーチングを進めてから、「進んで話そうとする」「学び合いで考えが深まる」と答える児童が増えた。教師は「児童理解が深まる」「授業研究の質が高まる」とよさを感じており、教師の共同は教育技術の継承にもなっている。

研究に大きな道筋を付けてくださった米澤専門監に感謝するとともに、課題については研究2年次へ生かしていくこととする。





エゾタンポポプロジェクト

～命をつないで～7年間の軌跡

大館市立長木小学校 教諭 望 月 まゆみ
教諭 花 田 千 鶴
教諭 佐々木 昂 大

1 はじめに

「エゾタンポポプロジェクト」を始めて、今年度で7年目になる。どんなきっかけで始まったのか、どんな内容で行っているのか、またこのプロジェクトを通して、子どもたちにどんな力が付いたのかをまとめた。

2 活動の実際

(1) 目的・目標・方針

平成22年度、プロジェクトが始まった当初は、保護活動を行うことを目的とした。しかし、保護活動や植栽活動を進めていくうちに、自然を守ろうとする心の育成につながり、理科や図工、国語、道徳等の各教科に活動が広がっていった。さらに、他の小学校や地域との交流活動に発展し、現在は、ふるさとを愛する心と地域のために役立とうとする志を育てることを目指している。

(2) 育てたい力と活動

① 課題解決力・創造力

「エゾタンポポはかせになろう」→エゾタンポポについて調べたり、表現したりして、エゾタンポポはかせを目指す。

② 主体的実践力

「エゾタンポポを守ろう」

エゾタンポポを育てて、エゾタンポポの群生地を広げる。

③ コミュニケーション力

「エゾタンポポを広めよう」→エゾタンポポの活動を紹介し、様々な人と交流する。



(3) 植栽活動

平成22年度、東京芸術大学の村山修二郎先生が、本学区にエゾタンポポがあることを発見し、保護活動への参加の呼びかけがあり、活動がスタートした。22年度は、4年生のみの活動で、群生地でスケッチや種の採取、種まきを行った。23年度は、4年生が群生地の生息数調査と看板立て、5年生が校地内に「タンポポの丘」を造成した。24年度から、一人一鉢として活動が全校に広がり、26年度からは、エゾタンポポをさらに理解するための「博士との勉強会」も行っている。

(4) 交流活動

平成24年度から被災地との交流がスタートした。「幸せの黄色い鉢運動」と名付け、黄色い鉢やプランターにメッセージを書き、エゾタンポポの苗を植え替えて宮県石巻小学校へ届けた。さらに、26年度からは、夏休みに6年生が岩手県山田町へ出かけ、エゾタンポポのプレゼントの他に、きりたんぽを振る舞ったり、太鼓の演奏を披露したりして、仮設住宅にお住まいの方や船越小学校児童と交流している。また、地域の老人施設訪問や県内の小学校への鉢や種のプレゼントも継続して行っている。

(5) 広報活動

6年生は、修学旅行先の函館市と交流先の岩手県山田町で、学校のことやエゾタンポポプロジェクトの活動をまとめたパンフレットを配布したり、種のプレゼントをしたりした。5年生は、きりたんぼまつりで、種の配布と活動紹介をした。

(6) 全校の活動と学年の活動

- ① 植栽活動は、全校の活動として行う。28年度は、6年生の提案による校章花壇に苗を植えた。来年度の完成を予定している。
- ② エゾタンポポとニホンザリガニを題材にした絵本作り（平成26年度5年生）
絵本作家から指導していただき、あらすじを考え、紙芝居を制作した。次年度、卒業制作として、絵本を作成し、地域の保育所や児童館で、読み聞かせの会を行った。
- ③ エゾタンポポ体操（平成27年度2年生）
文化芸術による子どもの育成事業でゼロダテの協力を得て、エゾタンポポのうたを作り、プロダンサーと2年生が、体操を考えた。
- ④ エゾポップちゃんテーマソング作り（平成28年度2年生）
イメージキャラクター「エゾポップちゃん」のテーマソングを作り、振り付けをした。
- ⑤ 鳳凰太鼓新曲作り「未来へつなごう小さな命」（平成28年度6年生）
エゾタンポポをイメージして、太鼓の新曲を作った。

(7) 児童会活動

- ① 平成26年度に掲示委員会が「イメージキャラクターコンテスト」を行い、4年生の女子が考案したイラストから、イメージキャラクター「エゾポップちゃん」が誕生した。
- ② 子どもたちが主体的に活動するように、28年度には、タンポポ委員会が発足した。

(8) イメージキャラクター「エゾポップちゃん」について

- ① 4年生の女子が考案したイラストを、イラストレーター青柳顕子氏がキャラクター化し、「エゾポップちゃん」が完成した。
- ② 平成28年度の3年生が、プロフィールを考えた。
- ③ 缶バッチャや140周年記念下敷き、着ぐるみやなりきり衣装、押し花絵など多くの関連グッズができた。中でも着ぐるみやなりきり衣装、押し花絵は、地域の方が作成してくださった。



3 成果と課題

- 保護活動や観察、調査を通して、動植物への関心が高まり、命をつなぐ大切さに気付く子どもが多くなった。
- 様々な表現活動につなげることで、子どもたちが自分たちの思いを具現化する達成感を実感することができた。
- 作業や活動の紹介、交流など様々な人と接することにより、自ら積極的に関わろうとするようになってきた。
- 自分の生まれ育ったふるさと大館と長木地区に誇りをもち、地域社会のために役立とうとする気持ちをもつ子どもが増えた。
- 子どもの思いと教師のねらいとする子ども像が含まれた単元計画を立てる必要がある。
- 各学年のねらいが達成できたかどうかを見取るための評価基準の設定が必要である。



資料で考える社会科、資料で活動する社会科

～色々な資料を作ってみよう～

大館市立成章小学校 教諭 山本起嗣

1 はじめに

多くの児童の実態として、歴史上の人物や歴史的事象、社会的事象に関する興味関心は高く、意欲的に学習している。しかし、歴史学習や地理学習が我が国のよさを再認識する機会となっているかどうかは微妙であり、知識の獲得が中心となっていると言わざるを得ない部分もある。社会科の究極的な目標である「公民的な資質の養成」につなげるため、歴史的事象や社会的事象についてもっと身近なものとして捉えられるよう、資料の充実が重要と考え、実践を行った。

2 研究の内容

使用する資料は、学習場面に応じて明確な意図を持って提示することをねらいとし、以下の5点について念頭に置いて資料作成にあたった。

(1) 興味関心を高める

ワクワク感を大切にするために、多くの写真・絵資料を用意した。右の写真は、「明治の国作りをすすめた人々」の単元導入で提示した一枚である。江戸時代の学習なのに、リオ五輪の選手の写真を提示され、子どもたちは「いったいどんな学習が始まるんだろう」という、ワクワク感あふれる表情をしていました。今回のリオでの日本人選手の活躍は、1850年頃の出来事に深く関わっているかもしれないことを伝えると「信じられない、何で？」という反応が見られた。これで興味関心はすこぶる高まった。ペリーの来航をきっかけに多くの外国文化が流入し、その中にスポーツもあることから、過去と現在をつなげて考えるきっかけとなった。



(2) 学習課題を引き出す

① 子どもの常識を覆す

児童の意識として、農業の盛んな地域と言えば、北海道・東北や九州を想起する。そこで、右のような資料を提示することで、都市のイメージがある関東地方で野菜生産が盛んなことに驚く。そこで、「なぜ関東周辺での野菜生産が盛んなのだろうか」という学習課題を児童から引き出して学習を進めていくことができた。本資料は、農林水産省から出されている数字のみの統計データを地図化したものである。小学校段階では、生の統計データの読み取りは非常に難しいため、資料を可視化してみた。色で都道府県を捉えたり、野菜のイラストでどんなものが生産されているかを捉えたりできるような工夫をすることにより、一目で分かる提示資料になり、時間をかけずに課題を導き出すことができた。



② 写真比較から学習課題を引き出す



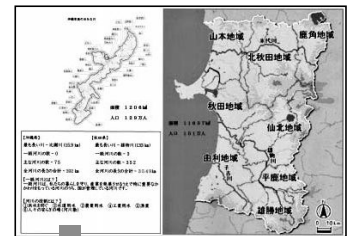
上の写真は、秋田と沖縄の住宅を比較検討することで、沖縄の住宅の特徴に目を向けさせ「沖縄県の住宅は、なぜ独特な作りをしているのだろうか。」という課題を導き出し、住宅の特徴を調べる活動を通して、あたたかい地域の気候風土について学習を進めたものである。

(3) 予想を持たせる

自動車組み立て工場の単元では、「プレス」→「溶接」→「塗装」→「エンジン組み立て」→「自動車組み立て」という、組み立て工場の全行程の写真を示し、気付いたことを発表させた。もちろんそこから学習課題も導き出すが、「この写真に足りないものはないか」と問うことで、「エンジンは作っているが、シートやハンドルは作っていないの？」という疑問が生まれ、「エンジン以外の主な部品は他の工場で作っているのではないか」という予想をもつことができた。そして「関連工場」の存在につなげることができた。

(4) 予想を検証する

予想を検証するための資料は、写真、統計資料、グラフ、教科書など様々なものがあるが、ここでは統計資料を児童向けに作り直したものを紹介する。沖縄には一級河川がなく、河川流路延長も短いことは国交省や土木事務所から出されている統計データを調べると分かるが、膨大なデータの中から必要なデータを抽出し、思考のよりどころとなるヒントを添える形で資料を作成した。その結果、沖縄の住宅にはなぜ水タンクが設置されているのかを考えることができた。



<p>【沖縄県】 最も長い川～比謝川 (15.9km) 一級河川の数～0 主な河川の数～7.5 全河川の長さの合計～392km 【一級河川とは？】 一級河川は、私たちの暮らしを守り、産業を発展させるうえで特に重要なかわりをもっている河川のうち、国が管理している河川です。 【河川の役割とは？】 ①洪水を防ぐ ②水道用水 ③農業用水 ④工業用水 ⑤漁業 ⑥人々の安らぎの場 (河川敷)</p>	<p>【秋田県】 最も長い川～雄物川(133km) 一級河川の数～3 主な河川の数～3.52 全河川の長さの合計～3549km</p>
---	--

(5) 発問の工夫



歴史的な事象を身近な物として捉え、思考させるために、勝海舟と西郷隆盛の写真を提示し「この二人がいなければ、2020年の東京五輪はなかったかも知れない」と問いかけた。その後二人の業績について調べると、江戸城無血開城に行き着き、帝都発展の基礎を築いたことが判明し、過去の出来事が現在や未来につながっていることを意識することができた。

3 おわりに

これまで多くの写真資料や自作資料を用いて授業をしてきた結果、子どもたちにとって社会科は、「何か面白いものが出てくる」という時間になってきている。子どもたちの身近に無いものを多くの写真提示によって「面白い」と感じさせることは社会科の授業にとって大切なことだと感じている。今後も社会的な事象や歴史的な事象を「自分ごと」として考えられるような資料提示の工夫をしていきたいと思う。



Road to Challenge 授業編

大館市立花岡小学校 教諭 永 瀬 有希子
教諭 金 拓 紘

1 チャレンジ授業とは

児童主体で進める授業のことである。教師が問題を提示した後、子どもたちが自分たちで課題を解決し、自分たちでまとめ、自分たちで練習問題に取り組む授業である。教師の介入は、必要最小限にとどめる。なぜなら、自分で課題を解決していこうという子どもを育てるためである。

6年生の理科「てこのはたらき」の授業。「てこがつりあうのには、何かきまりがあるだろうか。」と本時の課題が決まると、一人でノートに考えを書き始める子どももいれば、てこの実験を始めるグループもいる。一見ばらばらのように見えるが、そのうち「そろそろ話し合いを始める？」と言い出す子どもが出てきて、黒板の前で学び合いが始まる。教師が問わなくても、疑問があれば、「ちょっといい？」と聞いてみたり、それに対して、「それはこういうことだよ。みんなどう？」と言ったりしながら、学び合いが進んでいく。

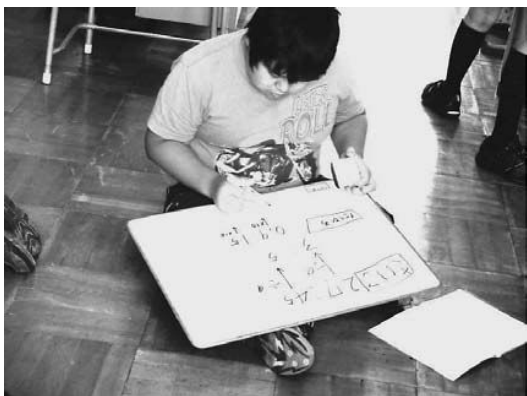
2 チャレンジ授業のコツ

「おや？」と思わせる問題提示

子どもの「ワクワク感」や「やってみよう」という意欲を引き出す。「選択肢の提示」「本当でしょうか」と問う問題、「誤答の提示」などが有効なようだ。例えば、「先生はお年玉を1,000円もらいました。500円を持って買い物に行き、75円のチョコを買いました。お店の人は、『おつりは35円です。』と言っています。本当でしょうか。」のような問題提示である。

解決ではなく「試行」

教師が必要以上に指示を出したり、解決方法を示唆したりすることはしない。教師がグループを作ったりもせず、子どもたちの主体性に任せる。一人で試行する児童もいれば、「一緒にやろう。」とペアで試行したり、そのうち「ここはどうなった？教えて。」とグループで試行したりするようになる。



(左：一人で試行する児童、右：グループで試行する児童)

場の設定

黒板やホワイトボードを子どもに解放し、自由に使わせる。「先生の許可を得たりしなくてもいいよ。」と話している。そうすると、子どもたちは自分の考えをどんどん書くようになる。それらを見比べて、教師が問わなくても「この考え方は同じだね。」と自分たちで共通点を見付けたり、「〇〇作戦だね。」と名前を付けたりするようになる。また、考えが途中までの友達がいると「つまりこういうことだよね。」と自分たちで補足説明をするようになる。4年の道徳「星野富弘さんの生き方から学ぼう」の授業。「星野さんのよいところってどんなところでしょう。」「それはなぜでしょう。」とテーマ発問を黒板の真ん中に掲げる。そうすると、矢印や吹き出し、色チョークなどを駆使しながら、子どもたちで板書を作り上げ、意見交流をするようになる。そうやって、自分たちでとことん追求し、解決していく力を育てていく。

ミニミーティング（終末）

学びをつなげる時間なので、単に「できてよかったです。」ではなく、「このようにしたら解決することができた。」「次はこんなことにチャレンジしたい。」「〇〇さんがこういう考えを出し、教えてくれたことがうれしい。」等という学び方について考えさせている。そうすることで、さらに主体性を高めることにつながる。そのために、授業中、教師は、子どもの考えや行動をしっかり把握することに努める。そして、次時の手立てを考え、全ての子どもが自分の変容を実感できるようにする。

ただし、チャレンジ授業だけでは、学習内容の基礎・基本の定着が不十分となるため、基礎・基本の徹底の授業にも取り組んでいる。

3 基礎・基本の徹底の授業とは

教師が教えるべき内容を楽しく教え込む授業のことである。そのために、授業の前半は、考えを出し合ったり、じっくりと話し合ったりせず、教師と子どもが明るく楽しく問答を行いながら授業を進める。教師がわざと誤答を提示すると、「先生間違っています!」「こうですよ。」と反応するようになる。子どもも教師も授業が楽しくなり、授業のテンポも上がるようになる。そうすると、授業後半の練習問題の時間も確保できる。そのために、今日は何ができればよいのか、ねらいを明確にしてぶれずに授業を進めることがやはり大切となる。練習問題をたくさん行った後は、次時の問題を提示して、次時の授業の課題を作ってしまうということにもチャレンジしている。「プリント祭りが楽しい!」「プリントをもっとください!」と意欲的な子どもの声が聞かれるようになった。

このように、一単元のうち、チャレンジ授業を3割、基礎・基本の徹底の授業を7割で行いながら研究を進めている。研究では、以下のようなことを大事にしている。

4 研究を進めるに当たって

チャレンジ授業もキャリア教育の一環と捉えている。だから、校内キャリア教育検討会を開き、児童にどんな資質や能力を付けるのか、そのための手立てをどうするかをみんなで話し合っただけ、全職員で共通理解を図りながら研究を進めている。

教師も「まず、やってみよう。」という意識でチャレンジしている。チャレンジしないかぎり、前進はできないからである。

今後も、子どもたちと共に、明るく、楽しくチャレンジしていきたい。



進化し続ける「ブルーリボン運動」

～いじめを防ぎ、潤いのある生活を目指して～

大館市立第一中学校 教諭 小 玉 智 和

1 はじめに

ブルーリボン運動とは、いじめを「しない」「させない」「みのがさない」ための活動である。いじめに対する意識を高め、一人一人が過ごしやすい学校になることを目指すための取組として、平成25年度からスタートして今年度で4年目になる。

ここでは、これまでの取組を振り返ることで、多様化していくであろういじめ問題にどう向き合っていくかを考えるきっかけにしたい。



2 活動に至る経緯

(1) 平成23年度以前

- ・いじめ調査で「いじめを受けている」「学校が楽しくない」などの否定的な回答が多く、トラブルが発生し、学校自体が落ち着かなかった原因の一つが、自己中心的な考え方や一方的なコミュニケーションのとり方をする生徒が多いことだと考えられた。

(2) 平成24年度

- ・大仙市立大曲中学校で実践されていた「心のカプロジェクト」及び「青いリボン運動」を参考に、自他を尊重し思いやる望ましい人間関係づくりを目指して「かがやきプロジェクト」が考案された。
- ・学校生活アンケートをもとに、「かがやき集会」を開き、その中で生徒会執行部から「いじめ撲滅運動」が提案された。

(3) 平成25年度以降

- ・「人を思いやる心」が見える形にし、一中生の意識改革を目指すため、「かがやき集会」中の提案を受ける形で、いじめ撲滅のための「ブルーリボン運動」と友達との協同学習のための「ブルーリボンタイム」を開始した。
- ・「ブルーリボン運動」は、いじめに関するチェック項目をクリアした生徒のみが名札に青いリボンを付けていた。「ブルーリボンタイム」は、話し合い活動が定着してきたため、現在は名称を使わなくなった。

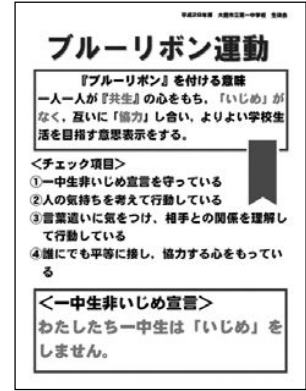
3 活動の実際

(1) ねらい

いじめをなくすことをはじめ、『共生』の視点から、仲間との助け合いや支え合い、励まし合いを通して、生徒自身の手で学校生活をよりよくしていこうとする。

(2) 実践

- ・「わたしたち一中生はいじめをしません」という意思表示をするために、全校生徒が名札に青いリボンを付け、よりよい学校生活を目指す。
- ・自己チェックカードの項目に従い、毎月末に自分の活動を振り返り、いじめに対する意識を高めることを目指す。



4 成果と課題

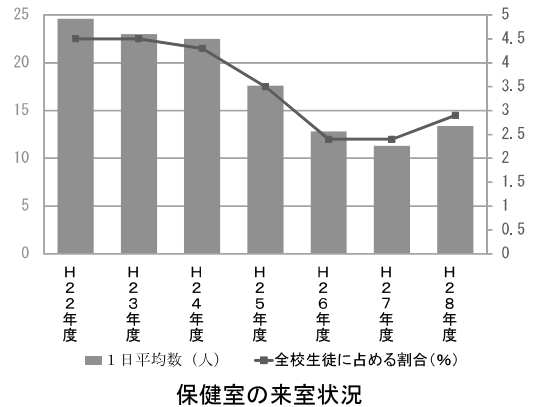
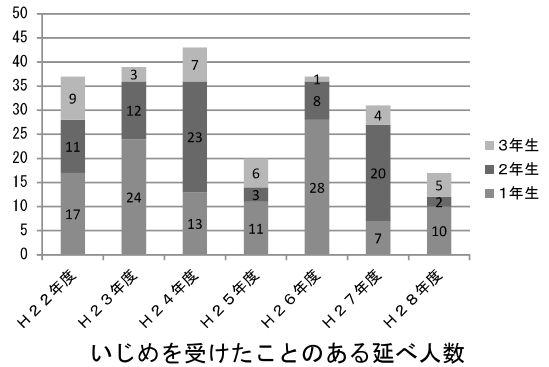
(1) 成果

①いじめに対する意識の高まり

- ア いじめはよくないという生徒が増加し、いじめの件数は減少傾向にある。
- イ 本人が認識していなくても、周りの生徒から情報が寄せられる。

②学級への所属感の高まり

- ア 保健室利用者の割合が減少し、学校が楽しいと考える生徒が増加傾向にある。
- イ 授業の中で、学級の友達と話し合う活動を楽しむ雰囲気がある。
- ウ 様々な行事において、1つの目標に向かって学級全員が団結する姿が見られる。



(2) 課題と対応

①自己チェックカードのマンネリ化

- ア 自己評価に加え、学級全体を振り返る項目をカードに追加した。
- イ 生徒会事務局員が各学級に出向き、一人一人にチェック活動の呼び掛けをした。

②SNSによるトラブルや悩みの増加

- ア 「ブルーリボン集会」を開き、情報端末機器の使用について全校で意見交換した。
- イ 「ネット利用の仕方 大館一中三大宣言」を代議委員と生徒会事務局員が提案した。

5 おわりに

いじめ撲滅を目指したブルーリボン運動は、教職員が働きかけ、生徒会が提案するという形でスタートした。今では全校生徒の中にブルーリボン運動が根付き、何か問題や悩みが出てくるたびに新しい提案が生まれるという進化を続けている。

いじめは「いつでも」「どこでも」「誰にでも」起こりうるものだが、早期に解決を図り、全ての生徒が楽しく過ごすことのできる学校を目指したい。そのためにも、教職員と生徒がいじめに対する意識を高くもち続けることで、いじめの未然防止に努めたい。



小・中の関連を考慮した古文や漢文などの 古典指導はどうあればよいか

大館市立下川沿中学校 教諭 井川 良太郎

1 はじめに

中学校へ入学したばかりの1年生にとって古典学習は好き嫌いが分かれるものである。国語教師として、両校種の子どもたちに古典の楽しさを感じてもらいながら、内容理解を図っていこうと教材研究に励んでいる。そこで、校種間の連携を大切にしたい古典指導のあり方や、古典学習に対する意欲の醸成について考えることにした。

2 研究の内容

(1) 学習指導要領の比較

まずは両校種の学習指導要領を見つめ直すことから始めた。簡単に整理すると、伝統的な言語文化に関して、主に興味・関心・意欲に関わることで、小学校から中学校にかけて音読するところをスタートにして始まり、触れる、楽しむ、親しむと指導内容が変遷していく。つまり、古典に親しむことが中学校古典のゴールであり、小学校では、それにつながるように音読するとよいということになる。

また、主に言語能力に関するものでは、小学校での古典に関する解説文からの内容把握から、中学校での原文による読み取りや古典を引用した書きへとつながっていく。小学校では登場人物や作者の心情追究は求められていない。

(2) 小学校での指導経験から

小学校で初めて本格的に古典を指導したのは5年生で扱った「枕草子」であった。清少納言の心情について追究してしまった。清少納言の繊細な感性を伝えたいという思いからだ。「なぜ不吉とされるからすをよいと言っているのか」「なぜ三つ四つ、二つ三つ飛ぶ姿がよいのか」といった発問を児童に投げかけた。児童の発達段階や学習指導要領に示された指導内容を踏まえない授業であった。その結果、児童の思考は停滞し、古典に親しませようという思いとは裏腹に混乱を招いてしまった。

(3) 中学校での指導経験から

小学校での指導経験から、古典の基礎である音読を大切にして指導しようと考えた。そこで、中学校への赴任当初、各学年の古典の単元において、音読する時間を必ず設けることとした。また、音読に目的意識をもたせるために、中学校1年生で「小学生に竹取物語の古典劇を披露しよう」という単元を実践した。披露する相手は、後輩である川口小学校の5・6年生である。後輩に劇を披露しようという目的意識のもと意欲的に音読に取り組んだ。また、単元を構成する際は学習指導要領の指導内容から逸脱しないように配慮した。

学習を終えてから、中学生はその後の古典学習にも意欲的に臨むようになった。また、劇を参観した小学6年生は、一年後に中学生となり同単元を学習することになるが、抵抗なく学習に取り組むことができた。

(4) 今年度行った実践授業から

小・中での指導経験から、音読の大切さや発達段階を踏まえた指導の大切さを実感することができた。また、それらを重視することで、意欲的に古典の学習に取り組む様子が見られた。そこで今年度、過去に指導に苦勞した「枕草子」について取り上げ、中学2年生に指導することとした。単元は「枕草子の魅力を小学生へ伝えよう」とした。後輩へ魅力を伝えるということが生徒の意欲的な学習につながるという成果があったためである。授業では、やはり後輩へ伝えるという目的意識が意欲的な学習につながった。半数以上の生徒が枕草子冒頭部分を暗唱することができた。また、清少納言の心情についても、小学校で指導した際には思考が止まってしまう苦勞したのだが、中学生においては深い読み取りをすることができた。

発表会では、分かりやすく魅力が伝わるように工夫した。「魅力的な提案をしよう」という単元ともリンクさせて構成した。実践授業後の振り返りシートの記述から、小学生の変容を考察してみても、中学生と一緒に音読したことで、古典のリズムに慣れ親しみ、楽しんで音読できたようである。また、中学校での古典学習に見通しをもつことができたと答える児童も多かった。

その振り返りシートから「古典が楽しいと感じることができたか」という問いには100%の児童が肯定的な回答をした。また「他の古典も勉強したいですか」という問いにも98%の児童が肯定的な回答をした。



【枕草子の魅力を小学生へ伝える】

3 成果と課題

成果として2点挙げたい。1点目に挙げたいのは、やはり音読の重要性についてである。古典は、読めることが楽しさにつながると実感した。2点目はこれまでの取組により児童生徒が古典学習に意欲的に取り組むようになったということだ。実践授業を行った2年生はその後、古典学習に意欲的に取り組んでいる。

課題として2点挙げたい。1点目は指導と評価の一体化についてである。竹取物語の朗読劇や枕草子の魅力を伝える発表会について、単なるイベントで終わってしまった感が否めない。発表会のどの部分を切り取って評価するのか。また、小学生にはどのように誰がどのような評価をするのか。評価の規準と方法を明確に準備して発表の場に臨む必要があった。さらに、事後の振り返りを丁寧に行う必要があった。この課題を克服できるようになれば、さらに小学校の児童や教師との交流が密になり、より一貫した指導計画が立てられるものと考えられる。2点目は児童生徒の発達の段階に応じた指導の必要性である。学習指導要領に準拠した指導計画を作成することはもちろん、小・中両校種の学習指導要領を読み、内容を把握しておくべきだと考える。そうすることで、発達に応じた指導ができるし、児童生徒にとっても指導内容が抵抗あるものにならないはずだ。

4 終わりに

古典は昔の人に思いを馳せることができるロマンであると考えられる。今後も各校種、各学年の発達の段階に応じた指導を積み重ねていき、古典が魅力ある楽しいものだと子どもたちに実感してもらいたい。そのために日々の研鑽に尽力していきたいと思う。

平成28年度 教育研究所 事業報告

教育研究所

1 学習指導方法及び教育内容を充実させるための指導・援助

事業名	事業内容等
①学力向上施策 おおだて型学力推進委員会との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・標準学力検査(NRT)の実施 *分析は各校ごと ・第8次学力向上に関する提言の中間評価 ・広報「SHI・N・KA」の発行 HP掲載 ・経費補助(用紙代)学年及び教科 【知能検査】 小4年・6年、中2年 【標準学力検査】NRT 小2・3年(国語、算数) 小4～5年(国語、算数、社会、理科)6年(社会、理科) 中1年(国語、数学、社会、理科) 中2年(国語、数学、社会、理科、英語) 中3年(社会、理科、英語)・第8次学力向上に関する
②情報教育の推進 情報教育推進委員会との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT活用研修講座実施 7月27日(水)午後 239名 会場：秋田職業能力開発短期大学校 内容：タブレットPC(小中各基礎編・活用編) 授業におけるタブレット活用実践 情報モラル講話 ・情報モラル指導・ICT活用実践事例集発行(2月)
③学校訪問	<ul style="list-style-type: none"> ・大館市教育研究会「総合研究会」の巡回 ・指導主事等による学校訪問 ・各校内就学指導委員会 ・教育委員による学校訪問 ・幼稚園・保育所等訪問
④大館市教育委員会研究委嘱校への指導・援助	<ul style="list-style-type: none"> ・休止
⑤大館市教育研究会	<ul style="list-style-type: none"> 4月13日(水) 第1回総合研究会 教科外部会 10月26日(水) 小学校第2回総合研究会 10月28日(金) 中学校第2回総合研究会 11月10日(木) 教科外・合同部会
⑥教育課程に関する事項	<ul style="list-style-type: none"> ・平成28年度教育課程実施計画書の確認と平成27年度教育課程実施報告書の確認
⑦ふるさとキャリア教育の推進	<ul style="list-style-type: none"> ・ふるさとキャリア教育推進事業 コーディネーターの配置 ・子どもハローワークの運営 キャリア・パスポートの配付 ・ふるさとキャリア教育夢事業 ・起業体験推進事業

2 教職員の指導力向上をねらいとした研修会の企画と実施

事業名	事業内容等
①初任者研修	<ul style="list-style-type: none"> 第1回 4月27日(水) 大館市内諸施設及び企業見学 第2回 8月19日(金) 子どもハローワーク体験・教育長講話
②大館市内諸施設及び企業等見学会	<ul style="list-style-type: none"> 4月27日(水) ふるさとキャリア教育講話 参加者：初任者、市外からの転入職員 見学先：大館郷土博物館、長走風穴館、秋田ウッド等
③夏季研修会 ※2年に1度の受講	<ul style="list-style-type: none"> 7月27日(水) 午前 会場：秋田職能短大 390名 内容：発達障害児にも周りの子どもにも有効な支援 ～園・学校で活用できるペアレント・トレーニング～ RESASASとWEBマーケティングツールの活用について
④講師研修会	<ul style="list-style-type: none"> 第1回 6月16日(木) 会場：中央公民館 内容：これからの教師に求められるもの 大館市教育委員会 高橋善之教育長 第2回 8月18日(木) 会場：上川沿公民館 講話・演習：導入から問題提示まで 指導案作成 第3回 11月24日(木) 会場：中央公民館 講話：発達障害のある子どもと共に育つ学級づくり 講師：石岡ひな子特別支援教育アドバイザー

⑤第28回教職員研究実践発表会	1月6日(金) 会場：中央公民館・市民文化会館 実践発表 17題 講演会 ふるさとキャリア教育フォーラムⅢ パネリスト：教育長 嶋野道弘氏 中許善弘氏 三浦栄一校長 伊藤哲朗教頭 米澤貴子専門監
-----------------	---

3 市民及び学校の要望に応える教育相談の推進

事業名	事業内容等
①教育相談事業	<ul style="list-style-type: none"> ・大館おとり教室～適応指導対象児童生徒への指導・援助 ・幼児通級指導教室「育ちの教室・ぐんぐん」 ・スクールカウンセラーの派遣(第一中 北陽中 東中 比内中) ・心の教室相談員の配置(南中・成章中・田代中)
②いじめ・不登校対策事業 いじめ・不登校対策事業推進委員会との連携	<p><いじめ・不登校対策事業推進委員会> 会場：大館市立中央公民館 第1回 5月 2日(月) 委嘱状の交付、基本方針の検討 第2回 2月 3日(金) まとめ</p> <p><学級担任研修会> 休止 <子育て相談会> 会場：中央公民館 6月 3日(金) 相談件数2件(2人) 講話15人 講師 菊地俊作指導員 村松勝信教育専門監 9月14日(水) 相談件数7件(10人) 講話18人 講師：池田和馬比内支援学校教諭 1月27日(金) 相談件数1件(1人) 講話15人 講師 石塚 章スクールカウンセラー</p> <p><ふれあい楽しみ会> 看護福祉大ボランティアの協力 第1回 9月 8日(木) 場所：リフレッシュ学園 参加者21人 カヌー体験・野外炊飯 第2回 12月 9日(金) 場所：大館市中央公民館 参加者27人 ケーキづくり、ゲーム</p>
③満5歳すてっぷ相談(親すてっぷ)	<ul style="list-style-type: none"> ・満5歳児の保護者学習会(就学に向けた子育て講話)年13回開催 講師：畠山佳子(比内支援学校)
④子育てポータルサイト「おおだて子育てねっと」	<ul style="list-style-type: none"> ・メールによる「子育て相談Q&A」

4 研修や指導に生かされる資料の収集と情報の提供

事業名	事業内容等
①資料センター事業等	<ul style="list-style-type: none"> ・教育資料活用のためのホームページ掲載 ○学校教育指導の重点(含教育研究所要覧) ○研究紀要「研」 ○所報教育おおだて ○おおだて型学力推進委員会だより「SHI・N・KA」 ・特別支援教育情報センターの開設 ○教材・教具、関係図書の整備、貸し出し ・教育専門監の授業DVDの貸し出し
②教科書センター事業	<ul style="list-style-type: none"> ・小・中・高校の教科書展示会の開催 時期：6月17日(金)～7月1日(金) 会場：中央公民館 ・教科書の整理・保管 大館教科書センター(大館市田代総合支所3階)
③研究所要覧	<ul style="list-style-type: none"> 5月発行 *学校教育指導の重点と合本 ・教育研究所の年間事業計画等
④所報「教育おおだて」の発行	年2回発行 (68号・69号)
⑤研究紀要「研」の発行	<ul style="list-style-type: none"> 3月発行 ・教職員研究実践発表会の発表
⑥調査分析等	<ul style="list-style-type: none"> ・教育全般にわたる諸調査 ・不登校及び不登校傾向調査(毎月) ・いじめ不登校調査(6月、10月、2月) ・全国学力・学習状況調査の分析と指導改善

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 県学習状況調査の分析と指導改善 ・ N R T 分析と指導改善
⑦生涯学習フェスティバル事業	<ul style="list-style-type: none"> ・ 展示期間 9月24日(土)～9月25日(日) ・ 園児、児童、生徒の作品展示 展示会場：中央公民館
⑧資料の発行	<ul style="list-style-type: none"> ・ ふるさとキャリア教育リーフレット ・ 子どもハローワーク まなびしんぶん
⑨郷土資料の発行	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「ふるさと大館名所手帳」の配付 *対象：小学校4年生 ・ 中学校社会科副読本「わが郷土大館市」(3月)
⑩諸団体との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教育関係機関 ・ きりたんぼまつり実行委員会 ・ 福祉関係機関 ・ 一般社団法人CEEジャパン ・ 育ちと学び支援事業(子ども課と連携) <p style="text-align: right;">ほか</p>

◆その他

①第2回博報教育ワークショップ in 大館 の開催 2016年8月25日～27日
 城南小学校登校あいさつ見学 / 釈迦内小学校授業見学 / 北陽中学校授業見学
 講義&ディスカッション・グループワーク / ひまわり刈り取り作業体験
 まとめ・ふりかえり

②エコアワード2016 特別賞受賞 2017年2月27日/東京ウイメンズプラザ・ホール
 子どもサミット代表生徒が表彰式及び事例紹介に参加

◆子どもハローワーク ～夏休みの体験から～



ぼくに任せて！
 (舗装工事見学 H.28. 8.4)



カクテルづくりに挑戦
 (バーリーズクラブ H.28. 8.8)



せんせいといっしょ！
 (加藤組 H.28. 8.19)



芸術はハートだ！
 (アトリエ コウ H.28. 8.9)

平成28年度 大館市教育研究所職員一覧

所長	貝森逸子
所長補佐	羽生昇二
係長	篠村朋子
指導主事	藤嶋俊英
主事	澤田怜那
キャリア教育等コーディネーター	長岩亜紀子
幼児教育アドバイザー	船木文子
就学事務員	石川恵美子
就学支援員	畠山瑠美子
大館おひとり教室	仲谷香
指導員	菊地俊策
支援員	菅原晶子
スクールカウンセラー	大塚綾
	佐々木百合

あ と が き

たくさんの先生方や関係各機関の皆様のご支援とご協力により、「第28回教職員研究実践発表会」が成功裏に終了しました。今年も就学前教育関係施設の先生方にも参加していただき、また「ふるさとキャリア教育」「おおだて型学力」としてここ数年継続して取り組んできた実践や、2コマ連続の発表も見られ大変充実した発表会となりました。教育交流をしている青森県藤崎町や岩手県釜石市の教育委員会、釜石中学校からおいでいただいたのも嬉しいことでした。

今年度大館市には、南は沖縄県嘉手納町や鹿児島県南種子町、北は北海道浦河町から34件187名の教育視察がありました。8月に行われた「博報教育ワークショップin大館」では、優れた実践をなさっている全国の先生方に市内の小・中学校の授業を参観いただき、グループディスカッションを通して、大館の教育の素晴らしさが見えてきました。

また2月には、大館の子どもたちに経済教育を通して生き方・考え方を学んでほしいと、CEEジャパンからアメリカの先生3名をお招きし、小・中学校各1校ずつで授業をしていただきました。授業を通して「心豊かな未来大館を作るのは、子どもたちである」という強いメッセージが伝わってきました。

今年の研究実践発表会の全体会では、前述の博報教育財団に関わっておられる嶋野道弘氏、一般社団法人CEEジャパンから中許善弘氏をパネリストとしてお迎えすることができました。大館市の教育を牽引して下さっている3名の先生方にも参加いただき、「ふるさとキャリア教育のこれからに向けて」をテーマに意見交流を行いました。参観者からは、「『こんな人間に育てたい』というぶれない信念があり、そのために授業があり、キャリア教育があり、日々の取り組みがある」「“教育は人をつくり、未来をつくる”という言葉が心に残った。生徒指導の充実を図りながら、児童が主体的に取り組む授業を目指していきたい」等の感想もいただき、今後の大きな進化につながる研修会となりました。

最後になりましたが、実行委員の皆様、研究実践発表をしてくださった皆様、そして、この会に参加した全ての皆様のご協力に心から感謝いたします。あわせて、大館市教職員研究実践発表会が益々発展し、教職員が主体的に自らの力量を高め、熱意あふれる実践が大館市全体に広がることを願ってあとがきいたします。